

NHK学園生涯学習フエスティバル

松山市短歌大会

平成三十一年二月二十三日（土）午後一時～四時

松山市民会館 中ホール（愛媛県松山市）

第一部

一、開会あいさつ

NHK学園通信講座センター長

中本 敦

伊予銀行常務取締役

河野 治広

一、選者紹介

一、対談「短歌の明日へ―日常からの発見」

大島 史洋
三枝 昂之

― 休憩 ―

第二部

一、表彰

一、選評

「未来」

大島 史洋

「りとむ」

三枝 昂之

「音」

玉井 清弘

NHK学園短歌講座専任講師・「未来」

中川佐和子

（五十音順）

一、当日詠「松山の春を詠む」入選発表

「遊子」

片上 雅仁

「心の花」

川又 和志

「やまなみ」

兵頭なぎさ

総合司会 フリーキャスター

北林きく子

ごあいさつ

NHK学園理事長 浜田 泰人

本日ここに「NHK学園生涯学習フェスティバル 松山市短歌大会」を、皆様とご一緒に開催させていただきます。

今回お寄せいただいた作品数は、自由題、題詠「人」をあわせて二千三百四十三首にのほりました。お寄せいただいた短歌の一つ一つは、作者おひとりおひとりの心のうちに、この文芸が深く根を下ろしていることを教えてくれます。日々のくらしと経てきた人生経験を見つめ、短歌を通してみずからの言葉と心のあり方を探求されておられる方々がこんなにも多くいらつしやることを知り、心より感銘を受けております。

わが国の古い伝統の上に築かれた短詩型文芸は、時代が変わってもその意義は変わりません。

昭和五十八年に開設された短歌講座は、これまでの三十五年間に、三十三万人を超える方々が学んでこられました。この流れがさらに大きく豊かになっていくことを願い、講座内容をはじめこのような大会や短歌学習の旅（スクーリング）など、教育文化事業の充実に、なお一層努めてまいりたいと思っております。多くの皆様のご参加とご支援を、よろしくお願い申し上げます。

なお、本日の大会大賞三作品は、各地で開催される大会の大賞作品とともに平成三十一年度の文部科学大臣賞候補作品となります。

最後になりましたが、大会の開催にあたり、選者の先生方、ご投稿いただいた皆様、ご協力をいただいた愛媛県・松山市ほか関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成三十一年二月二十三日

選者のプロフィールとひとこと

(選者は五十音順)

対談・選者



大島 史洋 (おおしま しよう)

昭和十九年岐阜生 「未来」編集委員・選者
現代歌人協会理事

歌集『センサーの影』『ふくろう』など
歌書『定型の視野』『アララギの人々』など



三枝 昂之 (さいぐさ たかゆき)

昭和十九年山梨生 「りとむ」発行人
日本歌人クラブ会長 山梨県立文学館館長

歌集『農鳥』『世界をのぞむ家』『それぞれの桜』
歌書『前川佐美雄』『昭和短歌の精神史』『啄木
—ふるさとの空遠みかも』『作歌へのいざない』
など

選者



玉井 清弘 (たまい きよひろ)

昭和十五年愛媛生
「音」選者 現代歌人協会会員

歌集『久露』『屋嶋』『谿泉』など
歌書『時計回りの遊行 歌人のゆく四国遍路』
など

良い歌が多いと思いました。一首ずつ読みながら、それぞれの作者の生活や心の動きなどを思ったことでした。今後もうたいつづけていってほしく思います。

タバコのみいよいよ冷遇されている今日はホテルの植え込みの中

この大会のひと月前にはNHK全国短歌大会があるから作品の質はどうだろうか。選歌の前にはそんな危惧を覚えたが、心配無用だった。地域の根ざした歌の説得力と全国からの力作。「人」を生かしてさまざまな暮らしが寄せられた題詠も楽しい。

心には青年のわれがまだいるが身体はやはり嘘をつかない

松山でのNHK学園の短歌大会は何年ぶりだろうか。いい作品に出合っって嬉しく思っている。多くの県に応募者がわたっていることは選歌をしていてわかったが、「遍路」「八ッ鹿踊り」「亥の子」など四国を取り上げたものが印象的だった。

獅子舞の油単のきらら足よつはずめるたびにかがよいを生む



中川佐和子（なかがわ さわこ）

昭和二十九年兵庫生「未来」編集委員・選者
日本歌人クラブ中央幹事

NHK学園短歌講座専任講師

歌集『霧笛橋』『花桃の木だから』など
入門書『初心者にやさしい短歌の練習帳』

当日詠選者



片上 雅仁（かたかみ まさひと）

昭和三十年愛媛生「遊子」代表事務局

松山歌人会会長

朝日新聞愛媛版「愛媛歌壇」選者
歌集『楢円軌道』



川又 和志（かわまた かずし）

昭和三十年愛媛生

「心の花」会員

愛媛歌人クラブ会長

日本歌人クラブ愛媛県代表幹事



兵頭なぎさ（ひょうどう なぎさ）

昭和二十四年高知生

日本歌人クラブ四国ブロック長

「香川歌人」副会長・編集委員

「やまなみ」運営委員

歌集『この先 海』

日常のワンシーンを自らの言葉によってとらえた歌、今まで生きてき

た中で大切に思ってきたことを言葉にした歌に、いい歌が多かったよう
です。自由題・題詠の作品は、それぞれ表現の工夫がみられました。そ
して作者に会ってみたい作品も多くありました。

春の野に鏡を置けば古き代の馬の脚など映りておらん

蜉蝣は冬陽のなかに金色の光の粒となりてさまよふ

真鍮のドアノブの丸い感触に母のことばの扉はひらく

瀬戸内の潮にうかびひかりつつ教会のやうな船がゆきをり

全作品を名前を伏せて印刷し、全選者にそれぞれ入賞入選作品を選んでいただき
ました。大賞、特別賞は特選の中から選の重なりを考慮しつつ、NHK学園大
会事務局で決定いたしました。入選作品欄は都道府県別に掲載いたしました。

NHK学園松山市短歌大会大賞

お遍路が逸れしボールを拾ひあげ村の童に投げ返したる

徳島県

天王谷

一

優しくはしないで下さい私は支柱なくした枯れ朝顔です

愛媛県

小笠原

和子

△題詠「人」▽

土砂崩れに吞まれし家を探さんと山裾に立つ人の小さし

千葉県

神崎

クニ子

日本歌人クラブ賞

住む街に城あるうれしさ或る時は旅人のごとガイドに付きゆく

愛媛県 野村 貴和子

松山市長賞

陽のにほひ草のにほひを纏ひ来て水軍太鼓の稽古始まる

愛媛県 井上 由美子

愛媛新聞社賞

早乙女にかり出されたる三人は来年島を出る中学生

愛知県 清水 良郎

伊予銀行賞

裏路地の老舗の茶舗の夕まぐれ二人がかりで木戸を締めおり

福岡県 松本 千恵乃

大島 史洋 選

★特選

早乙女にかり出されたる三人は来年島を出る
中学生

愛知県 清水良郎

一読、さわやかな感じのする良い歌だと思いました。
少女三人の明るい笑顔なども浮かびます。どこの島か
な、などと想像しながら読みました。

人工の骨はわたしの足になりきのうと同じこ
の道を歩く

埼玉県 坂田みつ江

自分の足で自由に歩けるといふ作者のよるこびが伝
わってくる一首。そのよるこびをかみしめながら、同じ
散歩の道を歩いている作者の姿が目に見えるようです。

題詠「人」

土砂崩れに吞まれし家を探さんと山裾に立つ
人の小さし

千葉県 神崎クニ子

たくさんの災害にみまわれた年でした。自然の前に人
間はいかに小さく弱いものであるかも知られました。
この歌は読む者にそんなことを感じさせます。

★秀作

あきらめて都会暮しとなる由の幾人目かや転居の知らせ
福島 田中 英敏

リハビリに努める君に励まされ五年後生存信じて生きる
群馬 矢嶋 とし

亡き兄の好みし甲斐駒ヶ岳仰がんと三分停車のホームに降りたつ
群馬 本川ミヤ子

去り際は「きれいな妻よまた明日」詐欺師のやうに君は逝きけり
東京 青木 孝子

妻の足さすりつつ思ふこんぴらさんの長き階段上りしことも
富山 山下 重信

パワハラがまかり通りしその昔忘れはしない上司の顔を
石川 堀 二郎

父書きし小説ひとつ残りいて百年のちのわれを和ます
岐阜 大堀せつ子

その話「○」か「×」かと聞く我に「△」もあると夫の余裕
愛知 鈴木 洋子

「げん気かな」たつた五文字の年賀状たつた五文字をしばし見詰むる
岡山 大森志津江

わが終の旅とならむかマロニエの花満ちてぬしロンドンの街
愛媛 卜部 圭子

冗談の通じぬ妻と半生を過ごしもうすぐダイヤモンド婚
福岡 中村 重義

検尿のコップの温もり伝わりぬ尿の温さも嬉しき齡
沖縄 田盛 幸子

題詠

ときめきと疾しさを抱き旅に出る親の介護を人にまかせて
愛知 高橋みどり

古い人ら広場いっぱい散らばりてグランドゴルフに集中しおり
愛知 湯朝 俊道

小説の『終わつた人』を読了す終わつた吾は厨にたてり
愛知 井村 徳光

老人の生きるは権利か義務なるか後期高齢保険証届く
山口 田原 隆行

「ほんとうに人間はいいものかしら」キツネに託した新美南吉
愛媛 小澤マズミ

無人なる販売所あり百円をチャリンと入れて大根を買ふ
愛媛 窪田 憲二

偉いねと人は言うけど立ち止まる方が恐いの言えないけれど
愛媛 豊田 里恵

待ち合はせの品川駅の人こみにまぎれて小さく手を振るいもうと
大分 田口 玲子

★佳作

土産とて洗濯物を任地より夫は持ち来ぬ土曜日ごとに	青森	河田アキ子
言ひ切るは避けるに如かぬ世となりて「ころ」と付きたる梅雨明け宣言	宮城	角田 正雄
落葉にも残りのいのちあるらむか朱の一枚しおりに生きる	栃木	箕輪 イセ
「はいチーズ」スマホ向ければほほ笑みぬ秋の夜長は曾孫が主役	栃木	池崎美代治
大正に生まれ昭和を生きつぎて平成の世の終りも見むか	千葉	高橋 真砂
リハビリに出掛ける夫の背の揺れが先週よりも小さくなりぬ	千葉	沖田 妙子
ロープウエーに乗客我と妻だけでガイドいつしか友達口調	東京	本橋 正明
同輩の衰えぶりをいう我に「同じだから」と娘は裁決す	東京	はいしんじゅ
白波にも流るる雲にも見ゆるかな光をうけて息する刃文	神奈川	遠藤千恵子
向日葵のすべてが元気なはずもなく孫の再発を受け入れる夏	静岡	富田 洋子
再生の録画面面の左下に暴風域が今も移動す	愛知	伊藤貴久代
ばあちゃん、こうしたほうが美味しいと兎はストローで熟柿する	愛知	八木ゆり子
収納の下手なる我が見ておりぬ羽をたためる天道虫を	愛知	細川 延子
彼岸花群れて咲きを線路わきに丸太積みあし製材所無く	大阪	熊ノ郷紀子
ラッピングのりぼんを解けばたちまちに深紅の薔薇が息づき始む	奈良	上田 紀子
若者にハガキサイズと伝えたり葉書は文化死語にはさせぬ	和歌山	中尾 加代
読み返すことはあるまい日記書く六十年間ひと日も欠かさず	徳島	本田まもる
横田基地の上空は米軍の物といふままならぬ戦後のいつまで続く	香川	秋山 君子
霜焼けの指を軍手にかばひつつ母は島を打ちてゐたりき	愛媛	藤本 末美
バスツアーも三日目なれば擬似家族ひとつ手旗の下に寄り添ふ	愛媛	品部 弥生

題詠

ちちははの声ときかまし風の音よつるべ落しにけふの日昏るる	福岡	藤村 義治
五つ六つ腕がずに残す背戸の柿棹をあやつる父の背よぎる	大分	佐藤 信二
真夜中にこおろぎ鳴いて目が覚める台風のと生きていたのか	鹿児島	彌榮 三郎
ただ一人の卒業生を送り出し三十五年の教職を退く	北海道	藤林 正則
「そだね」とふ選手の言葉温かくめぐりを包みて人笑顔にす	群馬	松下 昭代
トーストとモカの薫れる食卓に老人ホームのパンフをひらく	埼玉	平井加恵子
熱さまシートを額に貼りつけて診察に来る小さき病人	千葉	毘舍利愛子
水没の迫るツバルの国さがし人差し指で回す地球儀	東京	志田 彰子
この人の尻に敷かれて五十年錘を持たぬ子を羨めり	神奈川	守安 雄介
昼どきの静かな喫茶店 ^{サテン} で声高にスマホと商談する人がいる	富山	浦上 紀子
天に向け平らに咲ける菊の花人の分まで笑ふ楽しさ	岐阜	後藤 進
いざ行かん我を求める人あれば信じることは後からでない	愛知	清水 将一
長袖を年中着ている我のこと透析していると人は知らない	三重	村上 英明
五つ玉ポツリポツリと入れる手の百歳近き人の確かさ	岡山	長谷川峰子
人格なき番号に呼ばれドアを押す三ヶ月ごとの雇用審査の	山口	松本 茂
弟と見まがう人の通り過ぎ風の出でたり霜月夕べ	香川	久保 尚子
自転車の人らあふれむばかりなる上海の街遠き記憶に	愛媛	卜部 圭子
「寂しすぎ！」電話で叫ぶ男の孫は一人で夕餉食みしと言へば	福岡	荷福 節子

三枝 昂之 選

★特選

お遍路が逸れしボールを拾ひあげ村の童に投げ返したる

徳島県 天王谷 一

四国での短歌大会だからかお遍路さんの歌が多かったが、その中でお遍路さんが素顔を垣間見せたブランに惹かれた。ボールを投げ返すという何気ない交流の一瞬、相手は村の童、温もりのある一首。

ありがとうちよつと一緒にいてくれてほとんど一緒にしないでくれて

和歌山県 中尾 加代

展開がおもしろい。早世した連れ合いへの感謝かと読むと、がらりとトーンが変わる。さてさて一緒に暮らすことは幸福なのか煩わしいのか。複雑な内面を軽いタッチで詠んだところにセンスがある。

題詠「人」

裏路地の老舗の茶舗の夕まぐれ二人がかりで木戸を締めおり

福岡県 松本 千恵乃

裏路地の老舗の茶舗そして木戸。江戸の商家を思わせ、決め手は「二人がかり」。立て付けが悪いのか、重厚だからか、それとも夫婦二人の商いなのか。いろいろ想像させる暮らしぶりが味わい深い。

★秀作

ほろ酔ひの夫が唱えし平城山をさびしき時はわが口遊む
行き場なき原発六千発分のプルトニウムと同居の我等
立ちこぎで坂を登れば冬の虹入学試験まであと十日
正月も終わり家族は解散し二で分けられぬ夫婦に戻る
しやしきとキャベツをきざみするとりんごをむくも生きる証し
百歳を生きゆくもよし瀬戸内の大き入り陽を諸手に抱く
粉雪の道後の駅舎に戻り着くチンチン電車明治のままで
曖昧に生きているから分別はされず名のつくゴミになれない
春の陽も鋤き込み畑を耕せばつくし一本混じりてゐたり
穂芒のゆらぎはいのちの証なりこの世のゆらぎ億万のあり
この道を辿れば老母の笑顔待つ娘に還りゆくバス降りし
この頃にホップ・ステップ・ジャンプして跳べばよかった 青春遙か

題詠

夕暮の厨も吾もあかねいろ人參磨つてトマトを切つて
病める身を咎人のごと詫びながら流動食をすすりし母は
その先でひかりにはじけて消えそうだ非常扉のみどりの人は
わが名前(和子)は多き名前なれど名付けし人はひとりわが父
卒業から七十年の記念写真九十八人車椅子二台
ちゃん付けで夫を呼ぶ人みな逝けばこれからは吾がときき呼ばむ
逝くものは風と時間と人ですと観音菩薩の遠くをみる目
春の日の別れをおもひとまる指人事書類をつくりつつ、冬

- | | | |
|-----|----|-----|
| 茨城 | 草間 | とし |
| 栃木 | 松山 | 宏意 |
| 千葉 | 松田 | 和生 |
| 滋賀 | 田中 | 新一 |
| 岡山 | 綱島 | 麗子 |
| 岡山 | 大熊 | 一恵 |
| 愛媛 | 加藤 | 文男 |
| 愛媛 | 丸山 | 香苗 |
| 愛媛 | 渡部 | 節子 |
| 高知 | 依光 | ゆかり |
| 福岡 | 荷福 | 節子 |
| 大分 | 後藤 | 史子 |
| 東京 | 栗原 | 良子 |
| 東京 | 服部 | 敏子 |
| 東京 | 田島 | 千代 |
| 東京 | 岡本 | 和子 |
| 神奈川 | 山崎 | 和枝 |
| 愛知 | 藤掛 | 宏子 |
| 岡山 | 逸見 | 素行 |
| 愛媛 | 村上 | 敏之 |

★佳作

かさこそと落葉踏みつつ散歩する庭の小道を野良の小猫も
八十も半ば過ぎれば何事もアトミヨソワカアトミヨソワカ
ワニになりラッコになりて戯れし人ら去りたる湯船に一人
亡き兄の好みし甲斐駒ヶ岳仰がんと三分停車のホームに降りたつ
手造りのピザ窯開きを集まりぬ木立の中に食べて笑ひて
流れゆく雲であつても空という居場所はあつてきつと私も
中指にはめたるままの指抜きがペン持つときにふと気が付きぬ
去勢時の痛みに四肢を震わせる子牛見るのは辛きと兄は
ロープウエーに乗客我と妻だけでガイドいつしか友達口調
むしやむしやと雲丹がキャベツを食みてをり映像に知る雲丹に口あり
サイレンをBGMに暮らす街隣りの不幸を誰も知らない
われにさえ敬語でものを言いしこと晩年の母を憶うこの秋
被災せし故郷なれども舎弟らが稲の掛け干スマホで見たり
わが車おくり出したる遮断機は一度はづんで静かになりぬ
その話「○」か「×」かと聞く我に「△」もあると夫の余裕
高天原に始まりたるや天下り神代の伝統いまに続けり
泥酔せし息子はわれにまで「すいません」と会の序列の中にいるらし
百歳を生きゆくもよし瀬戸内の大き入り陽を諸手に抱く
悪戯鬼のままに老いたる者も居る里の祭りに山鳩が鳴く
ゴトゴトとオレンジ色の電車ゆく春のうれひは綱だなにのせ

北海道 宗片勢津子
栃木 渡邊 力榮
栃木 五十部澄子
群馬 本川ミヤ子
群馬 堤 由美子
埼玉 岡田 美幸
埼玉 岡田 弘子
千葉 毘舍利愛子
東京 本橋 正明
東京 亀井恵美子
東京 宮田 朝子
東京 岡本 和子
神奈川 村田 守
福井 田所 芳子
愛知 鈴木 洋子
大阪 金子 公宥
兵庫 嶋田富美代
岡山 大熊 一恵
広島 梅本 武義
広島 杉田加代子

運命の百ピース目のめぐり逢い君の窪みで僕は眠りぬ
霜焼けの指を軍手にかばひつつ母は鼻を打ちてゐたりき
取り忘れたスイカが一つポツつんと季節外れをたくましく生く
優しくほしないで下さい私は支柱なくした枯れ朝顔です
嗚呼あれはパワハラだった しかすがに堪えて昭和のわれら勤めき

—— 題詠 ——

海も山も人も染めて夕映ゆる伊予の岬に灯が灯る
なんとまあ巨大な葉っぱ一人占め白菜畑輝く大地
棒二本人と言う字は美しい夫に添いて五十年経ちぬ
引き波が足裏くすぐる逗子の浜四人が四人砂と戯ける
「人さまを」「人さまのもの」「人さまに」無学の母の論し忘れじ
咳をしても一人咳をし咳をする粥をすすつてまた咳をする
階段に手摺りを付けた亡妻を笑ひ残つて一人縋つて生きる
「よく使う事が感謝の術なり」と夫は先人の鎌を研ぎつつ
合唱の花束美しき退任式ひとり一人の顔を忘れじ
建物人が空気が変わっても過去は私の足下にある
「ほんとうに人間はいいものかしら」キツネに託した新美南吉
人一人いない無人の人界に亡き人住めり墓標となりて
綿津見のバシー海峡眠る一人で編みし鳥籠遣して
一人負い二人の手を引き買物す母たくましくまた美しき
マスクして目礼をして行きし人後姿ではたと気のつく

愛媛 梅原 秀敏
愛媛 藤本 末美
愛媛 岡田千代子
愛媛 小笠原和子
愛媛 三島誠以知
茨城 石塚 明夫
茨城 稲葉 秀子
千葉 近藤クニ
神奈川 松本 秀夫
富山 山下 重信
福井 山田 孔明
山梨 宮坂 延雄
広島 峠 美恵子
広島 向井 好美
香川 森本 義臣
愛媛 小澤マスマ
愛媛 山内 忍
愛媛 藤堂 三郎
愛媛 山口ひろむ
長崎 村崎美智子

玉井 清弘 選

★特選

顔はねえ川の水汲んで洗うんよ断水つづく大島の姉

山口県 近藤 順子

「大島」は周防大島のことだろう。水道水に頼り切っていた人々は、長期にわたつての断水に四苦八苦。若い人ほど困つたはずだ。実感のこもる姉の言葉を取りこんで巧み。

優しくはしないで下さい私は支柱なくした枯れ朝顔です

愛媛県 小笠原 和子

口語の柔軟な文体で、読む側に語りかける作。二句切れ、三句目以下で自己を客観的に描いている。「枯れ朝顔」と表現するが、復元する力を内に秘めた「私」である点が印象的である。

題詠「人」

午後三時カーテン閉めし人は祖父元銀行勤めてソロバン残す

北海道 高本 智宏

銀行は現在も三時閉店。「祖父」は明治、大正生まれか、謹厳な銀行での勤務は、自宅での生活にまでゆきわたつていただろう。一、二句の表現、さらに「ソロバン」が効果的。

★秀作

妻の冠りし麦藁帽子まだありて麦藁帽子留守番におく
立ちこぎで坂を登れば冬の虹入学試験まであと十日
宿下駄の旧ふるき刻印奥会津からんころんと朝市にゆく
幼児の描く台風緑色の短かき線の画面を走る
人間がチョウやトンボに惚れてたら戦争なんて絶対してない
漬物石くらの石に縄をつけ大地を突きにき「亥いの子亥の子」
お遍路が逸れしポールを拾ひあげ村の童に投げ返したる
遺るワイン飲めばあなたが遠くなる飾り棚に並ぶ二本のボトル
亡き母の白髪の中からむつげの櫛そのままそつと懐紙にくるむ
晴れ渡る高茂岬の風に乗るアサギマダラは群れて飛び立つ
町中の田んぼの水の水利権を胆管癌の夫は息子に言ふ
農と漁の祖父もつ幼ら呼びあいぬ畑じいちゃん 魚じいちゃん

題詠

「それぞれに器を満たし生きゆけ」と三人の子らに夫は遺しし
あの島が縄文人らの住み所同じ浅蜷をなんと食べしか
ひとつだけ「自分のための役割が」時と心を人間ひとにあげたし
人生は終の五年が鍵と言ひし温和な父の老路を偲ぶ
A型と問診表に書き思ふ柿本人麻呂の血液型を
広大な貯木場ありしわが里は瀬音ひびきて人語を聞かず
八ツ鹿を今年みたりは三人の子らが舞ふ石踏つは咲く庭に声張り上げて
週末の午後の回診女医さんのパンツルックに人ら華やく

宮城	大和	昭彦
千葉	松田	和生
千葉	山崎	蒼子
東京	岡田	仁美
愛知	久野	利典
岡山	三宅	照司
徳島	天王谷	一
香川	赤松美和子	
愛媛	檜垣	記代
愛媛	前田	充
愛媛	村上	咲枝
長崎	守田	里実
青森	大野あつ子	
宮城	木村	譲
茨城	築田	いと
奈良	宮本	郁江
岡山	大塚	允子
愛媛	渡部	節子
愛媛	前田	充
愛媛	徳増	善久

★佳作

ある時は花びらのごとある時は刃のごとく降る蝦夷の雪	北海道	樋口	幸子
本の帯はずせば白き寂しさにまた掛けてやるその本の帯	岩手	貝沼	正子
嫁入りにもたせてくれし白数珠とふと気づきたり回向のさなか	茨城	大熊佳世子	
亡き兄の好みし甲斐駒ヶ岳仰がんと三分停車のホームに降りたつ	群馬	本川ミヤ子	
ランナーは一万五千秋空に夢が駆け出す群馬マラソン	群馬	桑原	環世
朱の袱紗胸にたばさみ茶の師匠病まひを見せぬ希林の演技	群馬	石坂ふさ子	
手作りパン初めて食べたふわっふわ講師は娘新たな時間	埼玉	鳥根とき子	
犬の目も猫の目もみな眠る時妻と同じくほっと閉じゆく	千葉	昆舎利道弘	
「そだね〜」と訛れる声のやさしさは道に咲きつくたんぼの花	千葉	佐藤	陽子
虎杖を肴に銘酒酌みかわし縁結びし土佐のひろめ市場	東京	岡田	仁美
携帯を忘れて架ける赤電話十円たった十分もたず	東京	北條	忠政
雪とけて若葉萌えたつ太郎山一年生の春の遠足	東京	鳥羽	和子
朝餉にて吾が詠み歌を妻評し「いいんじゃない」で好日スタート	神奈川	小野	均
疲弊せし町にインターの完成す仕上げの白線まばゆきばかり	新潟	佐藤	満枝
「不出来だよ」照れ笑いする友の手に丹波黒豆ダイヤの輝き	福井	山村	輝子
中心を向き噴き上げる噴水はボンボン投げける玉入れに見ゆ	長野	柴田	康代
秀でたる鉄削る技人並みなことでは飯は食えないと夫	愛知	伊藤	絃美
そびえ立つ白いポールヘキック待つラグビーポール天高く跳べ	京都	中村	愛
泥酔せし息子はわれにまで「すいません」と会の序列の中にいるらし	兵庫	嶋田富美代	
履くほどに伸びゆく藁草履足半に戦時の夏を励みし記憶	岡山	黒田	道子

題詠

だるまさんがころんだのごと急停止急発進す水槽のメダカ	山口	清木	幸
わが手にも馴染みて軽し妣の鎌きようは玉葱百本植える	香川	岡田	正子
春の陽も鋤き込み畑を耕せばつくし一本混じりてゐたり	愛媛	渡部	節子
妻ばかり指輪が抜けると抜いて見せか細くなりし指を見せおり	愛媛	宮崎	幸雄
人見知り激しい孫も今朝起きて馴染んできた爺爺の膝上	秋田	鈴木	力雄
背丈より大きな楽器持つ人のりりしき顔にしばし見とれる	神奈川	風伸	せい子
コオロギの声する窓辺にススキ挿し人肌爛飲む七十二歳	神奈川	山口	敏男
占いはもう見ないのかと夫になる人に聞かれてふふと笑う	福井	西田百合子	
やさしくね、やさしいことは強いよ、宮城まり子氏たましひの人	静岡	杉本	弘子
理不尽な上司に息子は腹立てたれど「大人の対応したよ」と言いぬ	愛知	野田	幸子
町内の地藏供養の老人会持物欄に数珠と百円	愛知	真野	勝子
秋空に「はい」と大きな声のして新築現場の若き職人	愛知	細川	延子
「かまんよ」と伊予人言へりあやまちを詫ぶるわたしにはるかぜのごと	広島	杉田加代子	
マトリョーシカ中間あたりを希望する人にくるまれていたい立ち位置	香川	氏家	長子
「会社では俺はけっこう良い人」と夫が言うから酔ってるのだらう	愛媛	丸山	香苗
あの人の遺言だからと今年また電話掛かりぬ新米できたよ	愛媛	宇和上	正
顛顛に手を当つ漱石の人物像あんな一枚撮っておきたい	愛媛	真部	孝司
住む街に城あるうれしさ或る時は旅人のごとガイドに付きゆく	愛媛	野村貴和子	
スーパリーの接客係の人形に握手してみる人恋しくて	高知	池知さつき	

中川佐和子 選

★特選

陽のほひ草のほひを纏ひ来て水軍太鼓の
稽古始まる

愛媛県 井上 由美子

「水軍太鼓」の重々しい大太鼓の響きが聞こえてくる
ように魅力的な歌。稽古の場面でさえ厳かな雰囲気があ
る。「陽」と「草」の匂いから一転して「水軍太鼓」の
音に展開していて巧みである。

八十六の晝縫ふ兄は平成の退位にこだはり四
代にてたたむ

愛媛県 井上 晃章

今年四月三十日に天皇陛下が退位され、元号もかわ
る。「兄」は、四代も続いた晝屋を時代の移り変わりを
感じて終えるという。寂しさもあるが、晝職人として励
んで働いてきた誇りと充足感も伝わる。

題詠「人」

住む街に城あるうれしさ或る時は旅人のこと
ガイドに付きゆく

愛媛県 野村 貴和子

住人にとって、城は町のシンボルとなっていて、並々
ならぬ愛着を感じている。ガイドが語る城の魅力を旅人
に知ってもらうのもまた嬉しいし、自分も初めて知った
ような新鮮な気持ちも味わっている。

★秀作

ポセイドンが大時化の後に贈りくるる昆布、貝拾ひに浜は賑はふ

塩害の葉のふち茶色ちりちりとまゆみの木より裸木となる

われにさえ敬語でものを言いしこと晩年の母を憶うこの秋

駅伝のランナーたすきを渡した後走り来た方向き一礼す

大勢のお客の中に卓を拭きついと去りたり小鳥のやうな

アルミ貨を落としし程の不確かさうわさなれども言葉胸刺す

若者にハガキサイズと伝えたり葉書は文化死語にはさせぬ

あきつ翔ぶ山頂（あ）づくし雨燕、浅黄斑は青空に映ゆ

ノーベル賞受くる本庶氏の説く6C「continuation」だけは私にもある

百歳を生きゆくもよし瀬戸内の大き入り陽を諸手に抱く

妻去りし門人秀真ほつまに心寄せ子規居士詠みし歌に吾も泣く

取つて置きの小倉遊亀の果実の絵今宵机上に明日はポストへ

題詠

岸壁に仁王立ちする釣り人が波に負けじと歌う声太し

校庭は巨大な理科教室流星を大人も子どもも寝ころび見上げる

ニューヨーク一人暮しも三年目母国語しゃべりにネイルサロン行く

車座の大正生まれは人気者手拍子もらいてマイク離さず

アナウンサーが村の伝説など流しまたゆっくり発つ無人の駅を

小説の『終わった人』を読了す終わった吾は厨にたてり

大相撲観客のなか父に似る人の映りぬ一瞬のこと

テーブルの航海士の虫眼鏡に海ゆく人の孤独思えり

北海道 服部 十郎

千葉 高田 睦子

東京 岡本 和子

長野 柴田 康代

岐阜 三田村広隆

愛知 中村佐世子

和歌山 中尾 加代

鳥取 長谷川和子

鳥根 田中 勝美

岡山 大熊 一恵

愛媛 加藤 敏史

福岡 長尾 之子

北海道 高井 瑞枝

栃木 小池 芳子

東京 中安百合子

福井 永田 弘子

愛知 大下カヅヨ

愛知 井村 徳光

鳥取 桑田 紀代

岡山 森 富美子

★佳作

黄の色を喰い尽くすことコンバイン雨の予報に稲田を駆ける
 リズムよく鉄の音を響かせて夫は我が家の空を拡ぐる
 会話だけ出来れば良しと堂々とガラケー使うわれはゾウガメ
 我が町の子どもハロウィン地味だけど魔女もゾンビも一列歩行
 宇宙には漂ふごみあり深海の魚はプラスチックの粒子を宿す
 新品種売りの「富富富」をコンビニへ買いに走って味見を急ぐ
 やわらかき春の若葉の雨蛙摘果なす手に触れてひんやり
 仰臥して帽子を顔に休む男刈りし草の香あふるる中に
 真昼間の影なき村はむかし観たアメリカ映画のようで懐かし
 みづからの齢にみづから驚きて金平糖を一つ食べをり
 とろとろと蜜のような陽を浴びて山車がすぎゆくわが町角を
 絵の前に立ちてしばらく見上げる少女よあなたがアルの少女
 革命のシンボルとなり椿花ポルトガルではジャポネイラと呼ぶ
 悪戯鬼のままに老いたる者も居る里の祭りに山鳩が鳴く
 憧れの松山予科練不合格あ遙かなり卒寿となりぬ
 ラメ入りのラベンダーゴーグルに泳ぎきるはるか旅する蝶のごとしも
 わが手にも馴染みて軽し疵の銚きようは玉葱百本植える
 朝仰ぐ讃岐山脈真白き日半時早く職場に向かふ
 秋雲を絡めとりゆく観覧車空へ傷跡残さぬ速さに
 パスツアーも三日目なれば擬似家族ひとつ手旗の下に寄り添ふ

栃木 瀧田 聖子
 栃木 七井トシ子
 千葉 毘舍利愛子
 東京 貴山 浩美
 新潟 折居 伸
 富山 池田 正男
 長野 山岸千世子
 愛知 高山多津子
 大阪 岩本かつろ
 兵庫 藤田 純乃
 兵庫 木下加代子
 岡山 高原 晴子
 岡山 藤原由紀子
 広島 梅本 武義
 山口 松本 茂
 山口 倉谷 節子
 香川 岡田 正子
 香川 塚原味紀枝
 愛媛 岡本 秀美
 愛媛 品部 弥生

初木枯しの昼の電線に渡り来し鶴幾百の啼き交はす声
 返信は感嘆詞のみ二十五歳わたしがこの子の空蟬らしい
 水軍の矜持もうすれ老いづける漁師いくたり島に住みつぐ
 蟋蟀は翅震はせて何時までもいのちの限り闇を太らす

—— 題詠 ——

空知野は父の故郷すでにして父知る人は誰もるまさず
 百年を続く校歌を七人が歌い終わりにて閉校となる
 土砂崩れに吞まれし家を探さんと山裾に立つ人の小さし
 人相を悪くせぬようぎこちなくATMのカメラ気にする
 トンネルをいくつもぬけて無人駅 百余のゴーヤがおかえりと言う
 見たくなきもの真つすぐに見つめよと兵たりし人とつとつ語る
 食べ終えるパスタの皿に現わるる月の砂漠の商人とラクダ
 秋空に「はい」と大きな声のして新築現場の若き職人
 百キロの体をぶつけ八人の組むスクラムが大地動かす
 五十年作り来し梨を他人の手に托すをわびつつ礼肥を撒く
 乗客は一人と運転手わらいたり共に笑いてバスは発車す
 帰り来れば山茶花白く盛りなり無人の駅にへだてはあらず
 「ほんとうに人間はいいものかしら」キツネに託した新美南吉
 作りたる人思わせて冬瓜の飄々としてずしりと重い
 村芝居無骨男も駆り出され島人パワー弾けてをりぬ

北海道 富家喜代子
 山形 村上 秀夫
 千葉 神崎クニ子
 千葉 毘舍利道弘
 千葉 山崎 啓子
 新潟 折居 伸
 石川 中村 富代
 愛知 細川 延子
 京都 中村 愛
 和歌山 木村 召子
 岡山 横山恵美子
 山口 藤田 幸子
 愛媛 小澤マシミ
 愛媛 原田 満恵
 沖縄 多良間典男

入選

北海道

ぼろろろろフジコの音色わたくしを充す香りになって漂う

三 智

「父さんの頭に光が射してゐる」母は笑ひ手術を終へて

大原 廣子

「村はもうなくなりました。あの時間ときをまきもどしたい。」被災者の声

仁尾 泰子

……………題詠……………

独房に落日をみる男一人限り無き欲望の果ての空

石井 孝子

「おかえり」と言つてもらいたい人がいた かごしまの空おきなわの海

白坂 好伸

家を棄て老人ホームの明暮れに月の在処を捜しては寝ぬ

鈴木 慎子

急激に雲あつまりて雨の午後友の訃報を人伝てに聞く

仁尾 泰子

人けなきかはたれどきの国道を太き尾を曳き北狐ゆく

服部 十郎

青森県

道の端にボールの立ちて冬に入る除雪目印の赤白の縞

大野あつ子

移り気な雲を追ひやり真青な空が黙つて僕を見てゐる

木立 徹

老優を気どるにあらねど目をとちてわれもたまゆら渡しに揺らる

佐藤 悠一

きっかけを与えればよし教え子の古稀祝う会そつと立ち去る

平井 軍治

……………題詠……………

診療を受くればこころ和むなり相澤医師の良き人柄に

河田アキ子

乗る人の少なき電車のつり皮は振り子のパレード眠くなりたり

西館 礼子

岩手県

三陸の冬がやって来た。鮭にカキまつりで浜はにぎやかなる

佐々木俊子

サイパンの「パンサイクリフ」の崖に立ち戦時のおみな語り部に聞く

佐藤 政勝

母さんが二言目には節をつけ「だから言ったじゃないの」と叱る
南東の空に火星の明るき夜還相回向と妻眩きぬ

……………題詠……………

館洞 嗣雄
休石庄太郎

人気なき事務所に下がる（OPEN）の札を照らして満月のぼる

貝沼 正子

オスブレイ墜ちても墜ちてもまた飛ばすヤマトンチユー本土の人が死ぬまで飛ばす

菊池 陽

夫の死を悼みてくれし人人の次第に欠けし七年の日日

南館 増子

宮城県

「ただいま」と声はりあげて入りゆく誰も居ぬ家ここが実家さとなり

白井美沙子

雫のようにすみれの花にひそみいる花蜘蛛よあわれ蝶をとらうる

遠山 勝雄

乗客は今日も見知つた顔ぶれでサロンの如し町民バスは

安田 秀彦

……………題詠……………

集まれば「ココア」とたのむ一人ゐてそうかココアか 吾れもたのみぬ

白井美沙子

炭焼のおれに嫁いで五十年二人の朝に登る太陽

白石 治男

「おんちち」と名付けし人はどんな顔ちよつと寄りたいカラオケハウス

角田 正雄

月命日とあれば海岸に出でて来て人を捜すなり風の日今日も

大和 昭彦

秋田県

小柄なる若者なれど背すじ伸び工事現場にきびきび動く

大友 孝子

山形県

水槽の測で必死に鳴くかはづ光の粒が小さきぎみに躍る

安部 重子

秋雨の木々にむすべる玉しずく寒ざむとして風に散りゆく

太田 亮子

橙色のアフガン編みの手袋に手編みせし友の温み残りぬ

松田たつ子

トンネルをぬければ車窓の鬱の顔消えて一氣に真夏の海だ

村上 秀夫

……………題詠……………

ユーモアの応答をする人の居て待合室の空気やはらぐ

五十嵐春朔

人生はかくも上手くはゆかねども焼き塩さらさら壇に入れたり

名取 榮子

福島県

阿武隈に力尽きたる鮭一尾体傷つき波間に揺れる

青木 成徳

日々空の郵便受を開けた日に喪中ハガキは二通届きて

薄上 亮一

七十二年前のストーカー恋の引力知らざりしころ

大津 勇治

昔日の面影うすき限界の集落に住む吾も老いゆく

菊池 重堅

原発の事故地支援と集ひくるる下関の人の和みのなかに

後藤 智子

山菜萸の枝に一つの天道虫われの足音に向きを変へたり

新明 悦子

退職者集う総会の元特攻兵その後は如何にお過してしようか

鈴木 一功

恋の歌をこの頃詠んでいないなあ のうぜんかずら燃ゆる八月

芳賀 ナツ

……………題詠……………

赴任地の差塩に向かう磐東線新人ですかと前の老人

鈴木 一功

老い総出十一人の村人足作業の中に絆深まる

新井田美佐子

秋の夜のあかりを消してねむるとき「おやすみなさい」亡き人に言う

芳賀 ナツ

退職の記念の旅行の土産なる埴輪人形賀状に刷りぬ

水野 滋子

幽明をへだてし人の年月が我をのこして遠ざかりゆく

八谷 温子

茨城県

送別の帰路は夕陽にまむかひて一人ぼつちの長き影ひく

飯田 初江

たつぷりと種なし柿を食うており「おお」と驚く子規の横顔

岩瀬 悦子

地球をひと廻りして来たのかい 左頬打つ風懐かしき

倉持 勝男

まっすぐに野焼きの煙立ちのぼる稲刈り終えた里の小春日

黒澤 正則

堂々のマイペースなり二歳児のダンスの演技に棒立ちの孫

田中 久子

病む夫の四たび五たびの夜のトイレ介助は吾のほかにはあらじ

吉田 君子

……………題詠……………

冬の鍋今年も小さくなつてゆく夫と二人でよせ鍋を食む

岩瀬 悦子

娘が作る小さきおにぎり二個に足る一人ぼつちの日向の昼餉

草間 とし

人面土器のモニュメント立つ駅前で弥生の眼が今を見ている

鈴木 信男

魚のごと人波縫つて十七歳走りてきたり洪谷駅前

袖山 昌子

温かい物が売れるとコンビニの人が言いたり梅雨寒の日に

田中 久子

改竄の罷り通るも人の業根幹ゆらく砂上の楼閣

吉田 君子

栃木県

現代のアートと紛う造形美ほんきゅつぽんの縄文土偶

青木 一夫

若きらが注連縄作りを会得して祭りの務めは世代交代

池崎美代治

退職の日は刻々と迫り来るひき算の時間0が目の前

小池 芳子

三轟山えごの花散りうつくしい実をお手玉につくりて遊ぶ

高橋 君子

こつそりと姑に隠れて野良猫に餌やる舅を部屋から眺む

中村 葉子

本丸の跡を埋めたる彼岸花落城の日の炎のごとし

松山 宏意

……………題詠……………

「ケイロウ」と言いて幼なが鉢植えの花を持ち来るわれら二人に

押久保 準

芋幹に伸ばす手と手が触れ合いて見知らぬ人と「旨いのよね これ」

塩沢かつ子

大根を見定め逸品扱きたれば尻餅つきて一人笑えり

七井トシ子

人生の伴侶と決めて五十年りんどうの咲く庭に寄り添う

松山 宏意

群馬県

広告の紙飛行機が秋の空ジジの畑に無事着陸す

岸田 佳子

結花と言ふ新入社員配属でオス蜂たちの春はあけぼの

小森 真一

聞きとれずつい生返事するわれに失語の夫はふつと黙せる

砂賀久美子

.....題詠.....

吾妻郡孀恋村と先人の付けたる名前耳に優しき

集団の力学の中に身を置いていつしか物言はぬ人間となる

友よなせ言葉残さず一人逝く5年経っても募る思い出

さよならは最期の日までとっておく離れていても傍に居る人

朝三時ライトに照らされキャベツ穫る研修生とふ異国の人ら

声に出し「天声人語」読み終えて七十七歳今日の始まる

グラウンドゴルフに興ずる人々の頭上高くに羊雲の群

埼玉県

まだすこしいのちあるからまだすこし自由でいたいあとはまかせ

朝がおのつるにまかれた郵便受けそつとはずして手紙をとり出す

島ひとつありそうな雲流れきて茄子の畑に立ちて嬉しいぬ

母逝きて泣きはらした朝タクシーの運転手は餓さし出しくれき

石路の金の剥落雨しとど日暮れを急ぐ冬の足音

稽田の水のたまりに白鷺の姿うつりて秋ふかまりぬ

金婚を語りし友の帰る後ただ黙し拭く妻の遺影を

いたずらに扉に書かれた落書の二つの誤字に笑ひが起きる

西行の生きし世界と同じ山この風の音も空のおおさも

認知症のひとつが働く「間違いのあるレストラン」今日も満員

手引き書の通りに蒔きて生えて来し水菜の列に目を細めたり

小春日に等間隔で木にとまる青鷲家族のクリスマスツリー

春くれば四国遍路の旅に出入君のザックに鈴ふたつ付け

母と子が他愛ないこと話した日涙出る程笑いこけたり

天田 勝元

掛川真由美

黒崎 和子

桑原 環世

堤 由美子

松村 公子

矢嶋 とし

石田満里子

内野 恒子

尾堤 輝義

笠原 吉江

志村 美好

鈴木 武次

鈴木 照興

武井 猛

田辺 静子

中門 和子

根岸恵美子

橋口まさ子

平井加恵子

吉田 幸子

.....題詠.....

拝むのか許し乞うのか畦に立ち酷暑の太陽見上ぐる人あり

兄と親のあいだに立ちし弟を人は国連大使といえり

独りだが一人ではない人生は何処へ行こうと人の輪はある

馬手に杖弓手に回覧妻と二人黄葉もみちの坂のぼりゆく

人生は百年といい誰でもが長生きできると勘違いする

お米屋の店に一羽のオウムいて客来るたびに家の人呼ぶ

人の足踏み入らぬ道登りきて眼下に眺むのどかなる村

コメントの重なる「まあ、」を聴くうちに口べたな人の声が重なる

肖像画の祖父によく似る火を起すジオラマ人形の縄文人が

千葉県

休耕田淡き花びら幾万のコスモス揺るる吹良路に行く

粉ひきの大役終えし石臼は槓の根本に今を安らぐ

早起きは三文の得、長生きは百文の得百舌が高鳴く

船もやふ入江はいつか暮れ果てて煮凝り状の波が光れり

手放すと決めたこの土地この庭に子らの記念樹すくすく育つ

ゴミ出しの距離のカウント忘れたと火曜の朝の夫のなげき

唐辛子からくないよと告げればちいちゃん舌も老化してゐる

オール5の子の成績を褒めてからパパに似たねと妻二人ぼめ

どんぐりを見ると思わず手を伸ばすあつと言う間に返る童心

紅葉せる木々の向こうに遊ぶ猿振り返りつつ藪に入りたり

慰霊の日「生きる」の朗読中学生凜とした声平和の誓い

習いごと数あるなかに我が花の教室選ぶ小学一年男子

尾堤 輝義

笠原 吉江

栗原 弘雄

近藤 章

中緒知和子

原田 弘子

吉田 幸子

吉田むつみ

若山 巖

伊大知駿子

大谷 照

神崎クニ子

神崎クニ子

葛岡 昭男

佐藤 せつ

椎名 昭雄

菅谷 貞夫

春原 由治

田中 内子

角田 勇

日本 操

.....題詠.....

若き頃黄金の稲を鎌で刈る 今稲刈機は人乗せて刈る 大谷 照

人は皆記憶のほとりに佇んで恋のかけらを捨てずに老いる 葛岡 昭男

ミシミシと夜中に何かを訪れる人の知らない天井世界 正治 伸子

笹団子の香にたちあがる人麻呂の石見こひうた葉ずれの音よ 高伸 一郎

戦禍つづく古都アレッポの職人の月桂樹かほる石鹸いとほし 高伸 一郎

青春の入口に立つ中学生いろいろあるだろ「人間だもの」 角田 勇

昨日とは何も変わらぬ夫なるに社会は老人と格付けをする 鶴岡 伸子

閉校の大学の前通るたび廃村思う人なきキャンパス 毘舍利愛子

幾つまで生きれば元を取れるのかふと考えるわれの人生 毘舍利道弘

ケープルカー着くたび人を吐き出して高尾山頂人が渦まく 堀川 紀子

山中は霧につつまれ心細しかな人語に耳とぎすます 山本 一成

終わるなら終わってしまえ一人きり炎をつけたキャンドルひとつ ミラサカシラ

唯ひとり会えるとならば天の母優しくわが名呼ばれてみだし 相原 喜代

「前向きに」とはメディア用本当は辛く寂しいと被災者の言う 石田 邦子

黙したまま対馬丸記念館を出でゆけり中学生ら三三五五に 江里口紀子

ポケットのティッシュ出すと蟻一匹に落せば触角を振る 加固 康二

学期末夜なべ仕事で通信簿つけてた母の教師の姿 北川 孝規

木琴を鳴らすようには階段を降りなくなりてもうすぐ五年 栗原 良子

切り落としし枝を束ねる父の中の枝数少なくなりぬ 古賀のり子

秋草の川辺をゆけばアメンボがドット・ドットと命を見せる 高橋 登喜

ナイターの球音ひびく「子規記念野球場」より起る歓声 高橋 正敏

瀬戸の鳥めぐりつ旬のグルメ旅薯積み漕ぎぬ戦後がよぎる 中空 善彦

虚ろなる瞳がおよぐ同室の病む人を見て鏡をのぞく 服部 敏子

右肩だらりと裏返しハンガーのTシャツよまだ怒っているのかな 林 恵美子

日曜の「音楽の泉」聴きながらちよつとお洒落な朝のコーヒー 深野 光子

整理する引出しの奥花札が今宵久々明日を占う 恵 ハル

水飲むか「ウン」と言えども力なく枯れゆく夫の心音聞こゆ 山口 慶子

福ありと紙入れに在る椰の葉よカード時代に御利益疎し 山中 博士

.....題詠.....

口癖は「勝てば官軍」会津人の悲哀を胸に母の一生は 石田 邦子

一日が終わると当然一日が我が人生からは減っていく 北川 孝規

「人」の文字毎寄り添ひて生きてゆく歯車カチャと合わせてみたし 北島 孝子

レジ並ぶニツカズボンの若き人 香典袋一枚手に持つ 木村 悦子

今日からは大人料金銭湯に爺さん真似てゆつくり浸かる 貴山 浩美

結論を出し難くいて暮れはやく一人の部屋の灯りをつけぬ 栗原 幸子

夕空の鍾のごとし坂道をのぼりきつては沈みゆく人 栗原 良子

松山にその人ありと言わせしは子規に夏目に秋山兄弟 近藤 精一

がむしやらの働き蜂もこなしたり程なく呼ばれん昭和の人と 高橋 正敏

灰まぶし若布ほす人潮風にむぎわら帽のひらひら揺れる 瀧澤 春子

美人ねと言われ続けて八十年姉の努力を吾傍観す タナカミエコ

指揮するは余命宣告受けし人アヴェヴェルムコルプス響きたり 中村 りん

境内に集まりし人に神輿来てうねりうねってはじかれそうなり 早川 箏子

秋の花溢れる籠を自転車に乗せて走り去る老人ありけり 半田たつ子

携帯もスマホも見えない人探す、いたいた一人居眠る老女 北條 忠政

ウソついてお人が悪いとうらみごと彼女の亭主はぼくの紹介 松平 信久

神奈川県

当分は嫁に行かぬと強き娘の移り心や紅の花咲く

市原 昌子

園児らがわつと乗り来るお揃いの赤いバンダナ、リュックに結び

大石 知子

澄みきつた青空が胸ささる日に口ずさんでいた中島みゆき

大曾根藤子

不思議だな髭だけせつせと伸びるのは総身の力が失せて来てるのに

小野 均

今年一年生きぬいたことを記念してボジョレーを飲むとあえず酔う

河野 真理

もえあがるもみじをひろう君までも美しとうたう日々のやさしき

越野 藤子

砲弾の腿の傷痕薄らぎて今日の火葬に消ゆ兄の一生は

東海林千津恵

父祖の地の名残の雪の吾妻線湯煙なびく湯治場めぐる

富沢 昌晴

灼熱のゴーストタウン 献血を呼びかけ車三度走れり

長谷田光代

ほほ笑みて久しぶりねと病床の母は迎へぬ日々の見舞ひを

原 新平

車窓から見える紅葉に一年がもう経つのかと感慨にふけ

松浦 洋美

わら燃りて新しき繩の麦色が冬待つ松の雪吊りとなる

松本 秀夫

インゲンを作ると浮かぶ瘦せた父カス豆ばかり食べていたつけ

山口 敏男

旗すすきグランド脇に戦ぎいて球児らの声子規に届けよ

大和 嘉章

..... 題詠

パソコンは上書き保存の積み重ね今日も上書き私の人生

石戸谷行子

背を摩りくるる人の手あたたかし初めて鼻から胃カメラ入れて

大石 知子

拍手背に妻と二人で手を振りて最下位ゴールの区民マラソン

小野 均

AIの進歩に連れてよみがえる人間とはの永遠の問い

笠原 隆司

いにしえの人から届くメッセー日本の文字から魔法のことば

島津 幸子

若き日の我の写真送りくれし友人思ふ山茶花咲く日

高山 克子

速くゆく漁船へわれが手を振れば手を振りかえす漁師の一人

平松 直枝

人さまの心の中を読むすべを悟りて悲し選挙重ねて

府川ハツエ

成長は嬉しいけれど寂しくも昨日の君は思ひ出の人

松浦 洋美

幼き日を知りいる人のいなくなり尋ねたきこと永久に聞かれず

渡辺 和子

新潟県

霜月の空青くして静寂に包まるる村の柿の紅

折居 伸

シューカツの言葉に耳をそばだてぬ就活と知りスイッチを消す

酒巻 幸子

かくれ家か里山の沼すべりゆく水鳥の二羽木の間がくれに

高橋 俊宏

..... 題詠

早逝の娘によく似た人が来る思わず祈る幸せであれ

金子 和子

昭和には人造米と人絹が作られ今や人工知能

酒巻 幸子

人はみな走つてるいまやがて来る歩いてるいま歩けないいま

花岡 修一

他人様に負けじと細き田の畦を急ぎて老いの悲しさを知る

坂西 直弘

ふり塩をする手の癖は母に似む厨に一人白菜漬け終う

松浦 光子

富山県

ミニカーと絵本をリュックに積み込んでへの字の口で登園する児

浦上 紀子

..... 題詠

追伸のような人生帰り花母はたしかな軍歌をうたっている

盛田 敏子

..... 題詠

結局はいい人だねと言われたく口が一人で話をしてる

上嶋 美伊

今日ひと日誰にも会えず夕暮れに人恋しくてコンビ二へ行く

堀 二郎

福井県

チャンス見て脱走脱北引き揚げも果たして思えり苦しかったと

小林 幸枝

吾を忘れ子をも忘れし友のゐて無垢なる笑顔美しく愛しも

永田きみ子

紙オムツを買うためだけにふる里の店にポイントカードを作る

西田百合子

声かけに閉じし臉が返事する三本の管に命つなぎて

……………題詠……………

命名は「直人」の文字を墨たつぷり大寒の朝 越前和紙に

三人のドクターに姪もゐてくれる手術は師走二十七日

人魂を掬ふそぶりの科学の人本当ですか永田先生

山梨県

ゆつくりとすすむ痛だと若き医師の口許をみる夕焼けを見る

雲間より出る満月を仰ぎつつ今宵も一人終活をする

声高に歌った従妹のあのうたをのどじまんに聴く綾瀬市の秋

いつしかに夏は果てたり夕まぐれ秋明菊の紅くほころぶ

長野県

台風の過ぎて諏訪富士風強し四方の景色を腹這いて撮る

移り住む飯田の町に和む景りんごの並木 風越の山

白い花が大好きだから咲かせてる白バラ百合など庭の彼方此方

「行つて来ーい」皆で声かけバケツからバシヤツと放流あまたの稚鮎

表札の煤けた名前三姉妹格子戸開けて入つてみたし

太古より恵みの多し野尻湖へわかさぎ釣りにて三百匹余を

九十の歳も同じく鎌を振る畑にいずれは年など忘る

車椅子のひいばあちゃんの柿剝きを身を乗り出して見つむるひ孫

新築の祝いの席に「おまえに」を歌いし夫を吾は偲びぬ

……………題詠……………

あの人においしい珈琲飲ませむと淹れ方の本また読み返す

岐阜県

稚児姿暑い暑いと冠取り子らTシャツの行列となる

山村 輝子

高橋 忠榮

田所 芳子

古谷 正良

小尾嘉旺子

小林 静江

内藤富士子

廣瀬 妙子

磯谷留美子

木下 勝

清原由紀子

柴田 康代

関 啓

長岡製蓑美

藤井 典子

松島 房子

宮坂美恵子

清原由紀子

植田美和子

星くずのきらめき聞こゆ焼き立てのクロワッサンをそとかみ砕く

遊戯光の水面みつめて知らせ待つ小さき拳に合格あれや

口いっぱい頬張る癖の夫の言う「物無き時代に育つたせい」と

キツキツとう百舌の声にて秋を知る尾を振りながら鋭きその声

「チコちゃんに叱られる」されど映像に引き込まれゆくこのこち良さ

……………題詠……………

「人情」を父から学びし思いあり逝きて四十年笑顔が浮かぶ

かぶり物はずして汗拭くかくし芸二人羽織の見事なさばき

フワフワり月面に降りた人類を初めて見てたモノクロテレビ

さしは渡る伊良湖岬の藍深しもう会えぬ人ひたすら恋し

若き日の妻を描くと言ひつつもいつしか画布に彼の人笑まふ

玉いれに人でうずもる運動場老すこやかぞ百個も入る

静岡県

鹿潜み粉雪の舞ふ二月堂松明の火の駆け抜けてをり

半年ぶりの休みとあればかみさんがメシにビールを付けてくれたり

このごろになりてやうやくわがなまえこれよりなしと書きなれてくる

自分史に記せぬことのいくつあり胸うち深く眠らせてゐる

……………題詠……………

生きるものわれ一人かと思うまで窓のしじまに夕顔の花

人は誰も愛した花を残し逝く石路咲く庭に兄浮かびくる

むしゃくしゃの糸がだんだんほぐれてく人人人の渋谷歩いて

愛知県

腰を曲げ歩く難儀も生きてゆく日日に夢あり喜びもある

哀切の節回しなる「以呂波歌」法話に変えて住職唄う

松井 陽介

松尾 東一

松原 敏子

本山 順子

吉田 順代

大堀せつ子

片桐さつき

西 春彦

牧野 春子

松尾 東一

村上やす子

内久根真也

三枝 智秀

塩田 英男

鈴木 恭子

大庭 拓郎

久保田昌紗子

三枝 智秀

伊藤小夜子

伊藤 忠男

伊藤 忠男

無住寺に入山したる若き僧今朝も四時から木魚をたたく

今泉 一夫

勲記には「大日本國璽」の朱印不思議なものに出会いたる感

井村 徳光

古里の香りいっばい赤味噌の朝餉の旨さ身に滲みわたる

大島 陽子

ゆれ動く葦につかまり雀の子空の深さに息を詰めている

笠井 忠政

いつよりか体操揃いコーヒーの香る日もありコロニーの朝

笠井 忠政

母さんがいま婆さんになってたらこんな感じか鏡が笑う

加納 金子

波の上の光の帯もて入りつ陽とわれ一直線にしぼしつながら

久野てる子

この歳でどう生きるかと問われても答えに詰まる手術の前夜

清水 将一

久し振りに作りし餃子のこの味よやはりお店に任せるべきか

鈴木美耶子

秋空に二機が作りし美しき雲 交差模様は訓練だろうか

添島貴美代

亡き母は夢の中でも「また倒れ昼は点滴受けたの」と言ふ

高橋みどり

大和路の時の雫を掬ひ撮る保山耕一病をおして

高橋みどり

父が逝き胸の奥から聞こえます牛追う声と土起こす音

戸澤三三子

ツワブキが惨きほどまで黄を放つ母の過去聞く晩秋の昼

中村佐世子

十六歳で引き揚げし姉とつとつと記憶のかけらを吾に話せり

野田 幸子

弘前への花見ツアーを申し込むゆつくり咲いて長く咲いて

野田 幸子

椋鳥の群に雀もまじりゐてなんと平和な鳥の朝餉は

藤掛 宏子

稲穂たれ蕎麦の花咲く道の果て甲斐駒ヶ岳は天空に在り

伏見 範子

桜の春ペンを鋤へと持ち換えて田畑耕作花はまだ蒼

別府 道子

近頃は栓抜き不要となりて母の土産の赤き栓抜き

細川 延子

蟪蛄の三角頭に擬態と言う知恵あるを知る鎌で草刈る

真野 勝子

久々に酸素濃度の濃き信州木曾馬の瞳の中に山あり

真野 勝子

..... 題詠

お前には過ぎたる人と父が言うその人に添いもう五十年

伊藤 絃美

今年またホタル一つが庭に来て二人暮らしの話題としたり

今泉 一夫

ミャンマーのパコダで入り日待つ人ら百の言葉でカウンタダウンす

上田紀美江

車椅子使いて知りし心地よき人のぬくもり手のあたたかさ

太田 浩子

世話になる人に頭を深々と下げる父親板につきたり

笠井 忠政

マーメイドは人魚のことよ孫の言う薄暮の中に英語の絵本

島田久美子

外つ国の人らと並び忍者の里くの一の声折英語

鈴木美耶子

笑みの中に過去を語りているような寡黙な人と相席になり

添島貴美代

おだやかな人にはなれぬ国会の中継見つ罵声をとばす

添島貴美代

いつの日か会はず願ふその「いつ」を延ばせぬ人に今日会ひにゆく

高橋みどり

若者の七人に一人貧困で日本の社会に格差広がる

中根 英一

未亡人と戦後きびしき名を背負う百一歳の母は健在

中村佐世子

幸せは人の数だけ有るといふ子の行く先を思わじ言わじ

中村佐世子

会う人も待つ人もなき昼下り地下の茶房に一人書を読む

中山 忠義

三重県

一陣の風吹き来たり芋畑葉波騒ぎて風道しらす

内田 雄亮

傘寿なり老いを感じることあれど昭和平成を凜と生き抜く

古谷 勝信

滋賀県

「老いる」との言葉抜けてた設計図未来は一階に階段登って

田中 新一

朝に二度午後に三度の救急車昔モダンで鳴らした街に

田中 新一

心痛む企業戦士にお三時をそつと振舞ひつ午後の外来

東 佐久良

枯れ草と見れば根元にひしひしと青き芽を持つ霜月半ば

水上 博子

..... 題詠

桜蓼一りん持ちて窓口へ婦人新聞集金の人

東 佐久良

京都府

妻を呼ぶ夜明けの病棟に老いの声おとし逝きし夫のごと聞く

北川千代子

この息の止まれば吾も過去の人路傍の石を靴先に蹴る

近藤 好廣

宴終え散り散りとなる職員に春の雪舞う四条大橋

下岡 昌美

静まれるおぼろ月夜の片田舎刈田は揺れる一筋の煙

西村 修

断水の時間は長く見積もられ余命は短く宣告される

松尾留美子

図書館のかえりはいつものモンブラン一人の時間まであけはなし

美濃部民子

.....題詠.....

人が去り広くなりたる浜辺にはサンダルひとつ転がっており

下岡 昌美

八十過ぎて『老人と海』を読み返し最後の文に背筋を伸ばす

角山 治雄

人知れず心なえゆくときのあり鳥賊をさばくも手力のいる

中島扶美恵

天災に会ひたる人を慰むる術なくただただ肩を抱きぬ

林 佐知子

有料の婚活始めた友人の会話がとたんにつまらなくなる

松尾留美子

大阪府

蒼天に点となりたるジェット機の飛行機雲が瀬戸内わたる

金子 公宥

わが肩にベール掛けられし修道女すらんのやう「梅田」まで眠る

熊ノ郷紀子

温泉宿のロッカー同じ番号を使いつづけていた帰るまで

黒木 淳子

無言館よりたちのぼる「生きたかった描きたかった」声なき声が

間瀬 喬子

.....題詠.....

定例の味噌講習に来てみれば女子校生も二人来ており

赤澤 皆春

人という題あたえられ傘という字を思い出す朝の入浴

榎本 圭子

兵庫県

水馬に石を投げてかわされた記憶を覚ます君の返信
声失せた兄を見舞いて手を握り付度しつづ故郷の話

高山 葉月
上田 福男

酒蔵の廂にとどく瓶を積み仕込みはかどり新酒のけはい

上月 昭弘

倒木の朽ちゆくままに晩秋の奥入瀬溪谷はやも翳りて

齋藤恵美子

リモコンを隠され探す風呂上がりサッカー見られぬ「いい夫婦の日」

左藤 俊弘

脈打つごと月光澄める校庭に明日になれば子どもがいっぱい

間瀬 達也

ふるさとの先祖の霊送り立つ瀬戸の浜辺の夕陽の紅し

西村 節子

姉嫁ぐ門出の庭を村長の長持唄が空に染みゆく

浜畑 悦子

高原の白き尾花を吹く風が米寿の白髪ふんわり撫ずる

藤原 昭夫

.....題詠.....

人づてに恩師の訃報聞きし夜は恩師のレシピの餃子を包む

高山 葉月

〈ちよぼ汁〉の見かけの悪き紫は里人ぞ知る滋味なる豆色

大村 博子

雨の名を覚えてくれたあの人がメモに残した「狐の嫁入り」

木内美由紀

「人づて」を伝言ゲームで体験す支援学校今日の国語は

左藤 俊弘

草鞋はく子規銅像の部屋に入る地元の人は「子規さん」と言う

佐保田明子

妻と行く「からくり時計」春の宵囲む人垣歓声上がる

佐保田全弘

JR都会の駅の地下通路なに起こりしか人皆急ぐ

間瀬 達也

人は古り爺婆となる理ぞ吾古りたれど「ばあば」は良いぞ

中子 伸子

鯖を焼く電磁調理器手引書で夫と二人の料理教室

西村 節子

人混みという語は辞書から消えし街下車は二人のはまかせ五号

西村 徹

右見ても左を見ても古希の人 そうか戦後のベビーブームか我等

浜畑 悦子

奈良県

友里ちゃんは曾祖母の歳の百二を息はずませて数えあげたり

楠本 英子

.....題詠.....

甘樫の桜ひとひら掌にうけ 万葉人のひとりとなりぬ

松崎 欣子

和歌山県

柿送り新潟新米送られて葉付き土付き大根送る

北村 薫

墓石の風化してゆく音かすか祖と和解をなすすべはなく

木下 正博

パソコンに上書き上書き誕生日カード十八歳は眩しかりけり

熊代 修三

一様にスマホ手にして老若の声なき車内に寂寥感湧く

作部屋昌子

皮膚炎で嬰子のわたしが顔を掻くその手を母が眠らず握る

立川 寛智

小松菜の青虫シンクの穴に消え秋夜にわか闇深くなる

塚野佐江子

メロディーを奏でるやうに軽やかにしやほん玉の虹の弾ける

森本香代子

……………題詠……………

子供より学ぶ大人が多くなり友の子に学ぶ子の無きわれも

小池満里子

網棚からオーバーの腕垂れ下がりぐっすり眠る前席の人

中尾 加代

鳥取県

彼岸花咲き揃いたりいつしらに吹く風のなか吾は癒えたり

桑田 紀代

柿落葉燃やす煙はゆるゆるとみぞそばの花にからまりて消ゆ

佐々木順子

……………題詠……………

夕焼けのぬくもり残る無人駅昭和の匂いのふたりは無言

長谷川和子

島根県

目の前を淡き光の線曳きて蛍よ私をどこへ誘う

小村ミチ子

いちじくの枝で組み打つ蜂ありて摘む手休めてしばし観戦

後藤 元興

スキップで空を下りくる児がわれに「今日は」と言うスカート揺らし

田中 勝美

秋霖に台風の雨レンジよりほっと湯気立つ鯛焼きを出す

田中 勝美

木屋に寄りゆく蝶を見上ぐればコキと聞こえつ後聴こえざり

田中 勝美

金色を反し尾花の揺れいる野「Yesterday」を亡妻と歌えり

田中 勝美

白鳥の来れば華やぐ湖北平野ついに赤子が生まれしごとく

田中 勝美

わが愛ずる萩刈られしが傾りにはいつものころこ蟋蟀の声

田中 勝美

幾たりがこの山道を通りしや城を守るも城を奪ふも

岩藤由美子

今もなほ屋敷畑と呼びてゐる姉を手伝ひ玉葱植うる

植木 泰子

久しぶりの従姉は声まで伯母に似て「あんた叔父さんそっくり」という

岡田 耕平

遠くより乙女来たりて山に入り漆掻くため足場組みおり

杉 秀樹

宇和島へ連絡線に母子乗り出征の父と和むひととき

藤木美代子

もういない君のつぶやき想ひつつ海に向かひてメールを放つ

逸見 素行

角いくつ廻りて城に辿りつき松山港に白き船みる

森 富美子

みどり児の瞳にうつる蓮の葉に朝露ひかり水の匂いす

山口 洋子

久びさに同窓会の知らせあり追伸「是非にネ」に心はきまる

横山恵美子

……………題詠……………

こんなとき些細なること分け合へる人と呼びたし「朝顔咲いた」

岩藤由美子

「いい人だった」と人ら悼めり豪雨に流され四万十川まで旅をした人

黒田 道子

人混みを避けて歩いた大阪のその人混みが今は恋しい

藤原由紀子

大いなるサイコロのような家が建ち四人姉妹の自転車並ぶ

山口 洋子

広島県

ぶつぶつと何か文句を言っているくわばらくわばら妻の柚子味噌

岩本 幸久

白寿まで生きたる母の思い出を鏡と語る齢とはなりぬ

小川美恵子

週二回今夜の食事何食べたひとり身気づかう遠距離電話

栗田 孝子

青空に染井吉野は爛漫と植えし亡父とともに眺める

田頭 律子

目瞑れば群れ飛ぶ蜻蛉風やさし伊予路の広田はわれのふるさと

藤川 幸雄

明日もまた九十一歳を使いいきりミカンを摘まん ベッドにもぐる

藤田 久美

.....題詠.....

神様じゃないから人は本当のことはもごもご合間に話す

秋田乾一郎

四国路の一番札所雪となる同行二人鈴の音の冴ゆ

岩本 幸久

数人の齒科衛生士の声聞けどわが口覗く顔をまだ見ず

梅本 武義

ノルディックポールつきつつ庭園の紅葉を愛でる人多かりき

田中伯児子

三人のみすり後の空高く慣れない農とゆつくり生きる

向井 好美

山口県

一文字で書けるたやすさ人と言う未完のドラマ明暗を詠む

江守 成昭

亡き夫のささやく如きこちしてあかねの空をあかず眺むる

川本久美子

大正の瀬戸の花嫁わが母よ郷里は中島嫁入り船で

黒崎 千里

茜空二羽の川鶉は寄り添いて八分音符にリズムとりおり

幸田 堯子

掃き終えて振り向けばはや落葉する花水木二本ばつさり剪定

二宮 信子

蒼穹を映す川面にきらきらとさざ波揺るる白鷺が飛ぶ

浜田美恵子

ねこじやらしばかりの土地が知らぬ間に泡立草となりても売れぬ

弘兼 安雄

信頼も愛も確かなものでなく向かい合う卓遠く漁り火

藤井沙千子

深呼吸するがに白く息を吐く干したばかりのシャツに青空

藤田 幸子

お買得セールの度に「いつまでも貧乏してます」店主は言えり

松浦美智子

出んとするわれをとどめて蟬声は開けしドアよりなだれ込みたる

吉村 京子

.....題詠.....

特攻の義兄の遺品に風を通す 置きて飛びしか千人針あり

黒崎 千里

里芋の柚子味噌田楽それだけで女三人今日のしあわせ

藤井沙千子

巨大マシン放り出さるる人人人東京駅の波に揉まるる

藤井 重行

こんにははと言いて過ぎゆく青年のすがしき背中外の国の人

藤井美恵子

年賀状宛先不明で帰り来ぬ 壁に彼女の描きし一人

山縣満里子

徳島県

ただ一人死ぬる憐れを思いつつヘルパーさんの来る日を記す

小畑 定弘

絆とは半分糸で結ばれてあやふやにして据わりよき文字

下町 昭

あれやこれ笑ひとばして知らんぷり嘘に塩ふる四月馬鹿の日

下町 義克

よちよちとバアバの手まで四、五、六歩今日は男孫の歩行記念日

種ヶ嶋美恵子

「さつきです。十六歳になりました」あのはにかみ屋の小学生が

渡辺 健一

.....題詠.....

サラリーマンを陸人といふわが町の一大イベント伊勢海老の市

下町 義克

「隆人さん」と夫を名前にて呼びしこと若き日もなく老いたる今も

広瀬 艶子

列車降り人通り無き町並よ帰宅するまで誰にも会わず

船本ヨシミ

新聞に転載されしわが歌をそらんじくれる村人一人

本田まもる

香川県

どんな日も休日ポーナスもなきまま主婦業に励んで終活

寒川 靖子

人ペット落日映す潮溜りウユニ湖の光景となる父母ヶ浜

畠山志磨子

妹に着た切り雀年間に同じ二点のスボン交互に

矢野 操

.....題詠.....

ベテランの落語に笑わなかったが新人の話にわらってしまった

赤松美和子

「あの人の齢まで登る」後輩の基準にさるる「あの人」われは

大谷多加子

晩年の姑はすべてを忘れ去り良い人という仮面を外す

みよしすみこ

愛媛県

水牛の背に水ひたたらせクリークを渡る亡父の戦時郵便

合田 明子

脛三里もぐさに火を付け「なむあみだ仏」祖母が唱えしはるか昔よ

安部ヨシ子

子規と祖父漢山打ちし囲碁の石万翠苑の日溜まりに撫づ

池内五十鈴

秋桜の花開きたる月曜日あなたによく似た梟を飼ふ

大野 景子

私はいつ頃死ぬのと問ふ母の病室の窓から鱗雲見ゆ

岡本 千春

荷造りをしては次へと観光の拠点となりぬスーツケースは

岡本 秀美

うわべだけ詫びてしこりの残る夕、解体さなかの橋を見にゆく

小澤 マスミ

まあたらし畑のモノレールは煌煌と被災の山を銀色に染む

加賀山弘美

看護師と娘に手とられ足とられ七十三歳あおむけのカエル

加藤 文男

天高き銀杏葉落ちくる音静か重ね重ねて黄が深まる

栗林 京子

あの日よりかたわらに置く薔薇の花三月十一日はわが誕生日

造田 フクエ

半年の母の余命を告げられて泣くしかなかった二十歳の吾は

高橋 征子

歟立てて豌豆は此処そら豆は大地に指入れ種落としゆく

藤堂 三郎

目が覚めて今日はどこかへ行く日かね訪ねる夫がにんまり笑ふ

土肥 松子

降り立ちて何方なりやとわが郷の石鎚山を探すならわし

中原 脩子

黄金色稲穂の海の広がりぬ飛び鳥のごと荒れ地まじりて

二宮恵美子

八十歳の同級会の打ち合はせ終へて同じ総菜を買ふ

野村貴和子

夕顔の花白白と咲かして日暮れの家の未だ灯らぬ

野村貴和子

独り言ときをりいふは老い母のこころの声か秋の雲ゆく

橋本紀代子

百歳の妣の噛みたる数の子の孤独の音が耳朶に残れり

橋本紀代子

子育てをしている頃か桜咲く松山城の濠の翡翠

原田 満恵

雑踏に蟪蛄一匹混じりおり折り合いつけてきみと生きゆく

楢垣由美子

一点を見詰める母に「また来る」と言えば眼は我を向きたり

眞部 孝司

癩治療つづける夫がコンバインに油を注せり稲刈り前夜

村上 咲枝

分断と格差のニュース聴きながらコップ酒やるゴールデン街

村上 敏之

こけて泣きおくれた園児にテープ張る係り児童の機転さわやか

山口ひろむ

置き去りにされたスニーカー玄関に脱がれたままの型に鎮もる

矢野 あやめ

金曜は夕餉にふくらむ我が家なりたぬき子だぬき大騒ぎする

矢野 和子

総務部長の下の名前が出てこない小匙に落すうすくち醬油
クラス会あちらこちらで孫自慢独身のわたし終活かんぺき
……………題詠……………

山本 建男
横田美貴子

髪を梳き一人向き合い話して夜鏡のこちらとむこう

大西 伸子

つづまりは極悪人となれぬまま息子未満の男は海月

大野 景子

銀行の本人確認連れられて周りの手助け異常に重い

加藤 文男

石手寺に一人通路でたどり着く赤い椿よ次は五十二番だ

加藤 文男

人との出会いは不思議なものね偶然が生涯の師となり友となる

重松 千代

〈死ぬのはいつも他人ばかり〉と新調の喪服言ふなり姿見の中

品部 弥生

人生は作品である重ねたる年月ほどの凸凹である

曾根 篤子

越前より届く「一夜干し」酒によし人恋ふ夕辺は亡夫と飲みたし

寺坂トシ子

人生は百歳時代と主治医言う夢をつなぎてあととは茫茫

友澤ツヨミ

利き腕でなくよかつたね人びとが杖の右手を労らいにけり

西尾フミ子

子の遊びし古き人形を供養にと抱けばいとほし又座らせる

新田 克子

人臭き猫を載せたる新聞を猫ごとずらす文化の日なり

橋本紀代子

金髪の子を乗せたり口ぐせの父作らせし実印重し

平野 今子

保証人の判は押すなと口ぐせの父作らせし実印重し

宮岡 悦子

目の前にいかにも重き包丁に土佐の人の切る鱈を食ぶる

村上 咲枝

せせらぎを聞きつつ登る山峡に「坊がつる讃歌」歌ふ人をり

渡部 和子

月明り作りし人に似た案山子思わず声をかけてしまひぬ

渡部 裕子

高知県
磨り玻璃の光も柔き縁側に待つでなくとも秋は来にけり

大寺 和美

夏草の覆ひし小径をわけ入れれば青きどんぐり音たてて落つ

佐々木みどり

吾逝けば黄泉で待つ妻何と言うそんな老ぼれ知らんと言わむ

下井 重男

倒す向き確かめ仰ぐ杉の木の梢は高く夕映えに照る

徳永 逸夫

わが町の校歌作詞の土井晩翠を思いつつ行く岡城趾旅

永田 エミ

五万本の向日葵育てる古老らの夢は続けり大月の空

西原 時子

人気なきあばら屋増えゆく過疎の地に「ふるさとこそ」と母一人住む

和田美智子

..... 題詠

「人の影踏むでないぞ」と育てられ祖父は武士の子死に際も清し

土居 健一

福岡県

十四年間母の無き子を守りきて老いのいち日風のごとゆるむ

市川登美築

久久に素直に育つ孫に会う共に抱きたいあなたが居ない

井上 義昭

定年は諦念なりか籠もりゐて「G線上のアリア」聴きある

岸原 修

校舎より洩れくる楽の懐かしく畑打つ鋏もリズムに乗れり

常慶 禮子

千町無田に耳を澄ませば声のする沼地を拓きし入植者らの

松本千恵乃

..... 題詠

電話番号問わぬ人らと集いたり文の行き来の時の間楽し

市川登美築

からからとおひかけてくる柿落葉老いし二人を越しゆくもあり

恵良 操

けやき路の椅子に腰掛け占ひ師幸薄き顔で人を待ちをり

岸原 修

人ひとり解らぬままに共に暮らし二人となりて夕映えを見る

切田まさこ

珊瑚敷く竹富島の十五夜の月の兎と人あそぶ路地

六月朔日光

人は皆幸せだろかふと思う天神地下街雑踏の我

樋口 絹子

湯の里のゆで玉子掌に寒の朝往き交ふ人の下駄の音高し

藤村 義治

人よりも上手になったロボットが食事介助の後泣くことも

森内 道夫

長崎県

寡黙なる主に代わりご近所に花の香送るみかんの古木

西 美詩代

..... 題詠

俄か雨に無料の傘が配られて傘を片手に並ぶ人あり

井元 静夫

絶え間なくかつこうの鳴くこの森に遊びし三人の兄は逝きたり

佐々木祥一

熊本県

手綱引く消防団の勢子達は農繁期にも通う馬小屋

岩城恵美子

「世帯分送ります」とて保険証一枚届く今年は一枚

田崎 容子

..... 題詠

祝詞読む声の静かにぬくもりて卒寿の人へ流れゆくなり

宮崎 忠允

大分県

こぢんまりと平屋の家の建てらるる火事に焼けたる九十歳の男の

石吾 弓子

水無月の地にうづ高くつむ墮栗花日毎枯れゆくうす黄なる花穂

内山 淨子

ゆつくりと施設の庭を廻りぬし母の姿がよぎる小春日

衛藤美美代

命まだ残りあるかと空見上げ誌代一年分振込みに行く

太田 晋五

半眼の白杵石仏耳を研ぎ澄まして蓮の咲く音を聞く

佐藤 政俊

同窓会次回は古稀と約束しエイエイオーと気炎上げたり

重光 寛子

後期高齢の女集へる食事会、生命線の長さによく笑ひたり

津野 律餘

黒塗りの画布に白きを点・点・点深き眠りの山里を過ぐ

中田喜代子

バスを待つ寒き朝を聞えくる 木魚をたたく一途なる音

羽田野とみ

ときどきにこころの渇くときあり水母のおよぐ海がふくらむ

榎垣 実生

伊予灘の青き波立つ早吸の瀬戸の流れの海月となりぬ

平田千代子

娘子の万華鏡覗く我が日長万花の光眩しく映る

目代みや子

..... 題詠

空港の足湯をしばし楽しみぬ娘に会ふまでの旅人となり

石吾 弓子

「結局は人間性」と話しつつ女性二人が散歩してをり

後藤 史子

仮装して誰と分かつたぬハロウインの夜を或る人は暴徒化したり

後藤 史子

三毛猫といつも一緒にいた窓辺私は一人庭を見ている

田中由岐子

人生にもう疲れたといふ顔の一年生帰る二学期なかば

津野 律餘

あの人と花野ゆきたし語りたし危ふき風に吹かれてゐたし

野上ノブコ

冬日さす「荷揚小」跡黙々と発掘調査の人ら土掘る

羽田野とみ

蜜蜂をあつめるような花となり一人芝居を演じています

檜垣 実生

橋の人「オーイ釣れるか」しなる竿アユのはねるを夫は引きよせる

日隈香久子

私から無人の駅が遠ざかる一人旅なり秋果てる日の

平田千代子

また一人恩師の逝きてひむがしのひくきに蜜柑のごとき満月

深蔵 一子

鹿児島県

味噌汁のうまみの出しかたただゆかし思ふにまかせぬ調理の手立て

田中 司郎

沖縄県

台風の停電の夜は燭灯し家族揃って虎落笛聴く

平良 宗子

小春日に布団ふんわり膨らんでワルツのリズムで叩いてしまう

多良間典男

南島に上布を洗う海晒し日差しを浴びて模様浮き出す

多良間典男

……………題詠……………

旅人を受けて干潮ゆく牛車ゆかりゆらりと小島をめざす

多良間典男

沖繩の大通り埋める「エイサー隊」数多の人の沸き上がりけり

多良間典男

捕虜となり敵また同じ人と知る家族の写真われに見せおり

渡嘉敷唯正

NHK学園生涯学習フェスティバル
松山市短歌大会
入選作品集

平成三十一年二月二十三日発行

編集発行 N H K 学 園

〒一八六―八〇〇―一
東京都国立市富士見台二二三―二
電話〇四二―五七二―三二五二(代)

印刷 明誠企画株式会社

作品集の作成にあたっては、あきらかな誤字・脱字
以外は、原作のまま掲載いたしました。
誤植など不備な点がございましたらお許しください。
また落丁本はお取り替えいたします。

NHK学園 松山市短歌大会 入選証他専用額・トロフィーのご案内

「松山市短歌大会」ご入選おめでとうございます。ご入選の記念にいかがでしょうか。

《入選証》 1通 1,500円

- * A4判(297×80ミリ)でお届けします。
- * 切り離して短冊にすることが出来ます。
- * おおむね1か月でお届けします。

▼入選証

入選証を切り離して短冊掛けに入れた見本です。

①短冊掛け(青)

★作品は2行になります。ご指定のない場合は自動的に18字で折り返しますので、ご了承ください。

《専用額》

- ①短冊掛け(青)
 - 材質は和紙、壁掛け用です。
 - 1枚 1,500円(税・送料込)
- ②額(クラシックゴールド)
 - 上品なデザインで卓上・壁掛け両用です。
 - 1枚 2,500円(税・送料込)



《トロフィー》

- 作品をトロフィーにお彫りいたします。
- 1つ 13,000円(税・送料込)
- * 専用申込書をお送りください。郵便局からの払込票をお届けします。ご入金確認後からお作り始めます。お届けまでに1か月ほどかかります。

キ.....リ.....ト.....リ.....

平成30年度 NHK学園 松山市短歌大会 トロフィー専用申込書

ご住所 〒 _____

お名前 _____ 電話番号 _____

掲載P	選者名	賞名	作品(全文を記入してください)	数	金額

お申し込み方法 ①または②をお選び下さい。

①定額小為替の場合

下の申込書に必要事項を記入し、定額小為替（郵便局で購入）を同封して、封書でお申し込みください。

※定額小為替には、何も書かないで下さい。

②郵便振替の場合（払込取扱票そのものが申込書になります）

郵便局で取り扱っている払込取扱票の通信欄に（1）大会名、（2）作品の掲載ページと作品全文、（3）枚数、（4）選者名（希望の方のみ）、（5）賞名、また短冊掛け・専用額を希望の場合には（6）商品名、（7）数量を必ず明記してください。金額欄に合計金額を明記して、下記の口座へお振り込みください。

入選証および専用額トロフィーの
申込先・連絡先

〒186-8001（住所記入不要）

NHK学園教材サービス
松山市短歌大会入選証係
TEL 042-572-3151（代）

← 切り取って
封書のあて名に
してください

<郵便振替の専用口座>

口座記号番号													
0	0	1	9	0	7			5	6	3	6	0	8
加入者名		NHK学園 教材サービス											

- ※ いったんお申し込みいただいた後のご返金はいたしかねますので、ご了承ください。
- ※ 過去の地方大会の入選証については、平成11年度以降のものに限ります。
- ※ 郵便振替の場合、下の申込書及び振替払込受領証のご郵送は必要ありません。
- ※ 申込書にはお名前、ご住所、電話番号をお忘れのないようお願いします。

定額小為替専用

平成 30 年度 NHK 学園松山市短歌大会

入選証および専用額申込書

名前	フリガナ	受講者番号											
住所	〒												
電話番号	-	-											

○入選証

掲載誌 ページ	選者名 (希望の方のみ)	賞名	作品 (全文を記入してください)	単価 (1枚)	枚数	金額
				1,500 円		
				1,500 円		
				1,500 円		

- ◆特選・秀作・佳作の作品には希望される方のみ、選者名が印字されます。
- ◆同じ歌を複数の選者から選ばれた場合は、選者別の発行（1選者1枚）になります。ご希望の選者名を明記してください。

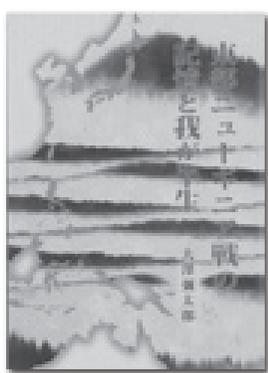
○専用額 ※ 専用額には入選証は含まれません。

短冊掛け（青）	数量	1,500 円 × 枚	金額
額・クラシックゴールド	数量	2,500 円 × 枚	金額

合計金額 _____ 円 を定額小為替で同封します。

※ 振り込みの場合は、この用紙のご郵送は必要ありません。

あなたの学びを 「本」にまとめて みませんか



日々の出来事や想いを詠んだ俳句や短歌を

一冊にまとめてみたい。

あなたの人生と大切な作品を

一冊の本にしてみませんか。

NHK学園の 自費出版



学習の成果を1冊に

人生の節目に本を出版される方が増えています。自分のための1冊、家族に贈る1冊。お手元の学習レポートがそのまま原稿になります。

NHK学園の講師がサポート

各分野の講師があなたの本作りをサポートいたします。添削はもちろん、構成やレイアウトもお任せください。跋文も書き添えます。

ご相談・お見積もりは随時

思い立ったら是非一度ご相談ください。学園宛に原稿をご送付いただければ無料でお見積もりもいたします。

合同作品集

全国の仲間とともに一冊の本を仕上げる楽しさが味わえる合同作品集。合同歌集「さくら」、合同句集「くにたち」、川柳合同句集「ふじみ」、「昭和・平成の時代を生きて」など特定のテーマに沿って文章を綴る企画作品集。

俳句、短歌、自分史、エッセイ、アート、絵手紙、書道、写真など、学習の成果を自費出版される方を全面的にバックアップいたします。

2019 出版個別相談会(参加費無料・予約制)

開催日	開催地	会場
2019年2/15(金)	姫路	ホテル姫路プラザ
3/15(金)	名古屋	キャッスルプラザ
4/5(金)	東京・市ヶ谷	アルカディア市ヶ谷
4/19(金)	水戸	水戸三の丸ホテル
5/23(木)	高松	高松シティホテル
5/24(金)	高知	高知サンライズホテル
6/20(木)	福岡・天神	アークロイヤルホテル福岡天神
6/21(金)	宮崎	エアラインホテル
7/26(金)	新潟	アートホテル新潟駅前

開催日	開催地	会場
8/22(木)	福島市	ホテル福島グリーンパレス
8/23(金)	青森	ホテルJALシティ青森
9/13(金)	東京・市ヶ谷	アルカディア市ヶ谷
9/27(金)	甲府	ホテルクラウンヒルズ甲府
10/25(金)	金沢	ホテル金沢
11/14(木)	京都	メルパルク京都
11/15(金)	和歌山	シティイン和歌山
12/13(金)	小田原	小田原お堀端コンベンションホール

※相談会にご参加できない方で、原稿をお持ちの方は別途ご連絡ください。場合によっては直接お問い合わせします。

下記の時間枠を設定、先着順ですのでお早めにご予約ください。

①10:30～11:30 ②11:30～12:30 ③13:30～14:30 ④14:30～15:30

- 予約制ですので、ご希望の開催地・時間枠をご連絡ください。
- 会場にご来場できない方、遠方にお住まいの方は、お電話やお手紙にて承ります。
- NHK学園本校(東京・国立市)では個別相談を随時行っております。事前にご予約ください。

原稿は揃ってなくても大丈夫!まずはご相談ください。出版アドバイザーがいてねいにご説明します。

お問合せ NHK学園 自費出版係 ☎042-572-3151(代) FAX 042-572-0061

あなたの短歌を、全国の短歌仲間のみなさまと合同歌集として1冊にまとめてみませんか。

古谷智子先生・藤島秀憲先生 選歌・鑑賞文

第29集

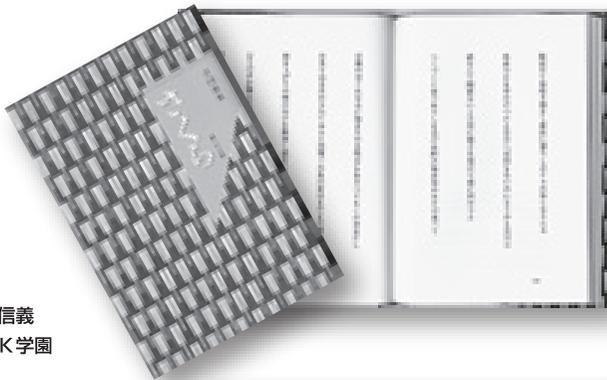
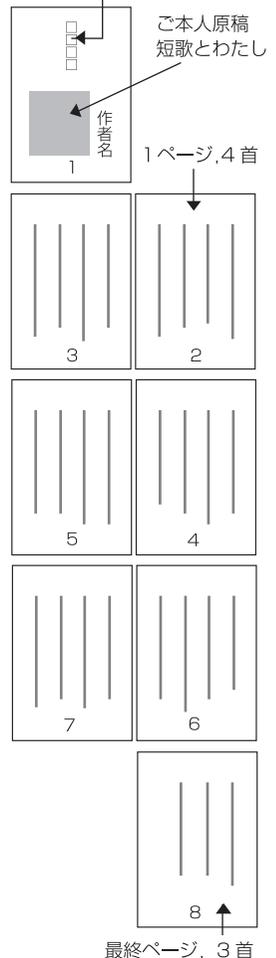
～はじめてでも安心!～

合同歌集『さくら』

リポート・大会・スクーリングなどを通して、たくさんの作品がお手元におありのことでしょう。NHK学園短歌講座の古谷智子先生・藤島秀憲先生が選歌(一部添削を含む)。この中から1首の鑑賞文を配本時に別紙にてお付けいたします。また、ベテラン編集者がていねいに本づくりのお手伝いをさせていただきます。どうぞふるってご参加ください。お待ちしております。

予約申込
受付開始!!

タイトル(題名)



装幀/菊地信義
発行/NHK学園

応募要項

募集締切 平成31年4月30日

発行 平成31年8月初旬(予定)

◆作品について

おひとり40首お送りください。

27首に選歌し掲載いたします。

※鑑賞文は掲載せず、応募者個別に完成後別紙にてお渡します。

参加応募用紙をお送りいたしますので、下記あてにご請求ください。

※すでに発表された作品でも結構です。

◆合同歌集『さくら』の仕様

サイズ: 四六判(たて18.8×よこ12.8cm)

製本: 上製本(ハードカバー) カバー付

お一人様: 8ページ 1ページに4首掲載

◆参加費用 おひとり74,000円(全経費・税込)

- 掲載された合同歌集『さくら』第29集 20冊配本(追加の場合は1冊2,000円になります。)

参加応募用紙をお送りいたします。参加ご希望の方は下記へご請求ください。

教材サービス『さくら』係 TEL 042-572-3151 (代)

NHK学園 〒186-8001 東京都国立市富士見台 2-36-2 FAX 042-572-0061

平成31年度 NHK学園 学習の旅〈お知らせ〉

琵琶湖をめぐる詩歌の旅 高野公彦先生とともに

琵琶湖の周辺には、見所がたくさんあります。今回の旅では、万葉の里・蒲生野、源氏物語ゆかりの石山寺、芭蕉の眠る義仲寺などの文学スポットや、水郷・近江八幡、鯖街道などの観光スポットを高野公彦先生と巡る、「みずうみの国・近江」を楽しむ二泊三日の旅です。琵琶湖にまつわる歌の話や、ホテルで歌会も行います。どうぞお楽しみに。



期 間：2019年5月21日(火)～23日(木) 3日間
旅行代金：東京駅集合・解散 126,000円
京都駅集合・解散 99,820円
募集人数：30名(最少催行22名)

同行講師

高野 公彦

・「コスモス」編集人



写真提供 (公社) びわこビジターズビューロー

3日間	スケジュール (予定)
1日目	東京・・・京都一蒲生野一八幡堀めぐり 一ヴォーリズ記念館一近江八幡 (泊)
2日目	彦根城一彦根港～マキノ一水鳥観察センター一朽木資料館一鯖街道一義仲寺 一大津 (泊) ホテルにて歌会
3日目	三井寺一石山寺一京都・・・東京

(訪問先は変更となる場合があります。)

「学習の旅」の案内書は
NHK学園「学習の旅事務局」まで
電話やFAXでご請求ください。
受付時間/月～金曜日(土日祝・年末年始休業日除く)の9:30～12:00、13:00～17:30

TEL 042-572-3151(代表)
FAX 042-573-6090

◆本広告の記載情報(時期・日程・訪問地・講師)は2019年1月1日現在のものです。
変更になる場合もありますので、予めご了承ください。

2019年度 生涯学習フェスティバル 短歌大会

下記のように開催を予定しております。みなさまのご参加をお待ちしています。

大会名称(案)	開催(発表)予定日	投稿締切	題	会場
鎌倉市短歌大会	5月16日(木)	3月1日(金)	*山	鎌倉芸術館 小ホール
伊香保短歌大会	6月25日(火)	4月5日(金)	*温	伊香保温泉 ホテル天坊
武蔵野市短歌大会	8月2日(金)	5月17日(金)	*野	武蔵野市民文化会館
誌上短歌大会	2020年3月3日	12月22日(日)	*道	—————

*題詠は題からイメージされる作品募集となりますので、作品に題にある漢字が入らなくても結構です。

生涯学習フェスティバル短歌大会のご案内

全国各地や誌上での短歌大会を開催しています。どなたにもご参加いただけます。規定の投稿用紙(コピー可)をお使い下さい。

ひとり何組でも、どなたでも応募できます。(自由題一首または自由題一首+題詠一首)

◆**題詠** ※題からイメージされる作品募集となります。

※題詠のみの応募はできません。

◆**未発表の自作に限りません。**

◆**二重投稿は固くお断りいたします。**

◆**投稿後の作品訂正、さしかえはできません。**

◆**同一作品、酷似作品が先行して発表されていた場合、入選・入賞を辞退していただくことがあります。**

投稿料

①自由題一首の場合 二、〇〇〇円

②自由題一首と題詠一首の場合 二、八〇〇円

それぞれ、一冊の入選作品集代を含みます。

◆**送金方法**

郵便為替(定額小為替、普通為替を郵便局で購

入)、現金書留、郵便払込のいずれかをご利用

ください。(切手の代用は不可)

郵便払込をご利用の場合

郵便払込取扱票の通信欄に大会名、組数と投稿

料をご記入の上、払込みください。受領書のコ

ピーを「のりづけ」欄に貼り付けて、ご応募く

ださい。

口座番号…00180-2-357944

加入者名…NHK学園短歌大会事務局

賞・発表

◆**大会大賞**(文部科学大臣賞の候補作品となります)、市長賞、選者特選・秀作・佳作・入選など。

◆**特選・秀作**内定者には事前に文書でお知らせします。

投稿された方には当日会場で入選作品集をお渡しします。(誌上大会を除く)

会場参加されない方には、大会終了後に郵送します。

◆**入選・入賞作品は**、NHKとNHK学園で使用させていただきますことがあります。

鎌倉市短歌大会

（神奈川県鎌倉市）

古都・鎌倉にて行われる大会です。
この短歌のつどいにぜひご参加ください。

投稿募集

自由題のほかに、題詠は「山」（テーマ詠）
題詠は「山」の漢字が入らなくても結構です。

投稿締切

二〇一九年三月一日（金）消印有効

日時

二〇一九年五月十六日（木）
午後一時～四時

会場

鎌倉芸術館 小ホール

鼎談

「四季の移ろいを詠む」
大下一真・尾崎左永子・永田和宏

選者

大下一真・尾崎左永子
永田和宏・東直子
（五十音順・敬称略）

当日詠募集（無料）

題「鎌倉の夏を詠む」
当日、会場で自作一首をお出し下さい。
入賞作品は会場にて発表いたします。



瑞泉寺

臨済宗の高僧夢窓国師が建てた禅刹。鎌倉石の岩盤を掘って作られた庭は禅刹庭園の原点とも言うべく、国の名勝に指定されている。山号は錦屏山、寺域が紅葉ヶ谷と呼ばれる所以。



鎌倉まつり（流鏝馬）

昭和34年から行われている鎌倉の春の恒例行事。鶴岡八幡宮を中心に、鎌倉武士を偲ばせる勇敢な流鏝馬、華麗な静の舞など、さまざまな行事がとり行われます。



江ノ電（七里ガ浜～稲村ヶ崎）

藤沢から鎌倉の10.0kmを結ぶ、海沿いを走る風光明媚な路線。



鎌倉花火大会

夏の一大イベント。みどころは海の花火大会ならではの水中花火。扇のように広がり、水面に豪快な半円の花を咲かせます。砂浜にもドーンという振動が伝わり、迫力満点です。

〒186-8001

東京都国立市富士見台 2-36-2

NHK学園

鎌倉市短歌大会事務局 御中

投稿在中

お問い合わせ先・投稿先

〒186-8001 東京都国立市富士見台2-36-2

NHK学園

「鎌倉市短歌大会」事務局

☎ 042-572-3151 (代)

(平日9:30~12:00 / 13:00~17:00)

ご投稿には、
左の点線を
切り、宛先
として貼る
と便利です。

ここから切り離し郵送

2019年度

NHK学園生涯学習フェスティバル
鎌倉市短歌大会投稿用紙

★投稿締切 2019年3月1日(金) 消印有効

※印欄は任意でご記入ください。

名前	フリガナ _____	(男・女) () 歳)
作品集に掲載するお名前	(フリガナ) _____	*本名と違う場合のみご記入ください
住所	〒 _____	
電話番号	_____	
生年月日	明治・大正 昭和・平成	年 月 日

受付番号(NHK学園記入)

大会当日
会場に

どちらかを○で必ず開んでください。
参加する 参加しない

受付番号(NHK学園記入)

自由題

題「山」

(希望者のみ)

テーマ歌。

「山」の集句が入ら
ない場合

自由題	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____
題「山」	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____

※願書のものを添付してください。

府県道

作品集に
掲載する
お名前

(フリガナ)

のりしろ

投稿料を郵便払込された方は
振替払込受付証明書(お客さま用)
を貼ってください。証明書がない場
合は下記へ払込日をご記入ください。

- 投稿料
 - 自由題 1首の場合 11,000円
 - 自由題 1首と題詠 1首の場合 11,000円
- 投稿料のお支払い方法に
 - 印をつけてください。
 - 現金書留
 - 定額小為替 ・ 普通為替
 - 郵便払込 (月 日 に払込)

*入場券は、投稿組数にかかわらず、投稿者1名につき
1枚(1名様入場可)の発行となります。
*印がついていない場合は「参加しない」とさせていただきます。

伊香保短歌大会

群馬県渋川市

今回で18回目となる恒例の大会です。
まだお越しでない方はぜひご参加下さい。

◆投稿募集

自由題のほかに、題詠は「温」テーマ詠

題詠は「温」の漢字が入らなくても結構です。

◆投稿締切 二〇一九年四月五日(金)

消印有効

●日時 二〇一九年六月二十五日(火)

午後一時～四時

●会場 伊香保温泉 ホテル天坊

●選者 沖ななも・斉藤斎藤

坂井修一・高木佳子

主催 NHK学園・渋川市・

(二社) 渋川伊香保温泉観光協会

後援 NHK前橋放送局

◆当日詠募集 (無料)

題「伊香保の夏を詠む」

当日、会場で作一首をお出し下さい。

入賞作品は会場にて発表いたします。

◆伊香保短歌大会へのご参加をお待ちしています。



伊香保の町

多彩な魅力に満ちた、伊香保の温泉情緒

湯がでたのは、かれこれ二千年も前の話。長い歴史を持つ群馬県伊香保温泉の町並みは、名所石段街を中心に、昔ながらの素朴な温泉情緒でいっぱいです。石段をのぼり切った湯元温泉地横に、こじんまりとした佇まいながら開放感いっぱい露天風呂が広がります。伊香保の湯は昔から子宝の湯として知られ、温度は43～45度、茶褐色でまろやかな湯質が特徴です。

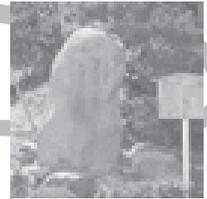
伊香保温泉
温泉情緒めぐり

伊香保の名は今でこそ、ここ伊香保の町名として残っているだけですが、万葉の時代には今の榛名山一帯を指していたようで、「万葉集」巻14の東歌の中、「上野国(群馬県)の部には「伊香保」に関する歌が25首中9首詠まれています。

- 1 森林公園管理棟前
- 2 長峰公園(池の前)
- 3 文学の小径
- 4 ロープウェイ見晴駅東
- 5 湯元飲泉所横
- 6 伊香保神社境内
- 7 観山荘西側



石段街



10 水沢寺駐車場

い香保ろの八坂の埋塞に立つ虹の顕るまでもさ寝をさ寝ては



11 万葉植物園

水沢寺駐車場の東端、道路沿いの柳の木の下にある。町で建てたものとは別個のもので、桐生市の医師・森田文夫氏が昭和五十八年に建立奉納したものである。背丈程の岩塊にはめ込まれた虹形の研磨石の歌碑。本碑の裏の、四枚の銅板をはめ込んだ副碑には、和洋両文で説明が追加されている。

8 峠三差路

い香保せよ なかなかいけに思いどころこそしつと 忘れせなふも

伊香保にいる背背の君よ、あなたはこの頃私とこのころのななかかし(仲子「妹」に、大変な思いをかけていなさるようすが私は、何時かあなたと一緒に寝たことがあつた、このことは決して忘れないうすからね……くやしい。

9 水沢寺境内

い香保嶺に 雷な鳴りそね吾が上には 故はなけども 兎らによりてぞ

いかほの山から発生する雷様よ怖い音をして鳴らないうておくれ俺には何のことはないのだけれど俺が好きなのの子が怖がるから……。

お問い合わせ先・投稿先

〒186-8001 東京都国立市富士見台2-36-2

NHK学園

「伊香保短歌大会」事務局

☎ 042-572-3151 (代)

(平日9:30~12:00 / 13:00~17:00)

2019年度

NHK学園生涯学習フェスティバル
伊香保短歌大会投稿用紙

★ 投稿締切 2019年4月5日(金) 消印有効

※ 印欄は任意でご記入ください。

名前	フリガナ _____ (フリガナ)	(男・女)
作品集に掲載するお名前	〒 _____	(歳)
住所	*本名と違う場合のみご記入ください	
電話番号	— — — — —	
生年月日	明治・大正 昭和・平成	年 月 日

受付番号(NHK学園記入)

大会当日 どちらかを○で必ず開んでください。
会場に 参加する 参加しない

受付番号(NHK学園記入)

御中

府県道

作品集に掲載するお名前

(フリガナ)

投稿在中

ここから切り離し郵送

ご投稿には、左の点線を切り、宛先として貼ると便利です。

〒186-8001

東京都国立市富士見台 2-36-2

NHK学園

伊香保短歌大会事務局 御中

自由題

題「温」

(希望者のみ)

テーマ歌。

「温」の無音が入らな〜んか。

※願書のものを送還させていただきます。

のりしろ

投稿料を郵便払込された方は
振替払込受付証明書(お客さま用)
を貼ってください。証明書がない場
合は下記へ払込日をご記入ください。

- 投稿料
 - 自由題 1首の場合 11,000円
 - 自由題 1首と題詠 1首の場合 11,000円
- 投稿料のお支払い方法に
 - 印をつけてください。
 - 現金書留
 - 定額小為替 ・ 普通為替
 - 郵便払込 (月 日 に払込)

* 入場券は、投稿組数にかかわらず、投稿者1名につき一枚(各様入場可)の発行となります。
* 印がついていない場合は「参加しない」とさせていただきます。

短歌を愛好する方ならどなたでも入会できます。

創立から70年、「歌人相互の親睦」と「歌壇の発展」のために活動しています。

会員募集中

主な活動

- 全日本短歌大会
- 会誌「風」（活動報告・会員の作品・他）
- 日本歌人クラブ各賞の設定
- 現代短歌セミナー（講演・シンポジウム）
- 地域優良歌集の表彰
- 『現代万葉集』（1800名超のアンソロジー）

※下段参照

問い合わせ・申し込み先

日本歌人クラブ

〒141-0022 東京都品川区東五反田1-12-5 秀栄ビル2F

TEL 03-3280-2986 FAX 03-3280-3249 ホームページ <http://www.kajinclub.com/>



『現代万葉集』 作品募集要項

— 日本歌人クラブ・アンソロジー — 二〇一九年版 — 第65巻



本集は毎年五千首に及ぶ作品を十五項目に分類しており、年々の創作の視点、現代感覚の推移などが展望でき、多方面からご好評を得ております。どうぞ奮ってご参加下さい。

一 作品

平成三十年一年間の自選作品を項目の①～⑮の中から一つ選んで三首お書き下さい。

二 項目

①自然・春・夏・秋・冬（たとえば春なら春にまとめる） ②動物（鳥・虫など含む） ③植物 ④生活 ⑤仕事 ⑥愛・恋・心 ⑦生老病死 ⑧家族 ⑨教育・スポーツ ⑩旅 ⑪戦争 ⑫社会 ⑬都市・風土 ⑭災害・環境・科学 ⑮芸術・文化・宗教

三 参加料

三、五〇〇円（歌集一冊。送料を含む）未入会の方も応募可。七項の住所に応募用紙をご請求下さい。

四 締切

平成三十一年三月三十一日

五 発行予定

二〇一九年十月下旬

六 編集・発行

編集 日本歌人クラブ
発行 NHK出版

七 応募・請求先

〒141-0022 東京都品川区東五反田
一十二二五

八 振替口座

〇〇一八〇一三一三二七四

日本歌人クラブ『現代万葉集』係
電話 03-3280-2986

《原稿の書き方》

- 仮名遣いは新・旧どちらかに○をつけて下さい。項目番号は必ず書いて下さい。なお、①は自然・春・夏・秋・冬の区別をお書き下さい。
- 詞書は付けないで下さい。
- 作品のルビは新仮名・旧仮名に合わせ、平仮名で付けて下さい。
- 必要に応じて表記等を編集委員会にて修正することがあります。
- 下欄には郵便番号・住所・氏名・結社（一社のみ）をお書き下さい。